
悪魔が来たりて

ネコヌマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔が来たりて

【Nコード】

N4884N

【作者名】

ネコヌマ

【あらすじ】

あの冬の日、ヘルマンという悪魔が召喚されたことがすべての始まりだった。これは、人間界に興味を持った1柱の悪魔が織り成す物語。

なお、悪魔・人物・事象についてオリジナル解釈・アンチなどの表現が入ります。それらを好まれない方は読まれないことをお勧めします。

人間界に行こう（前書き）

皆様こんにちは。ネコヌマと申します。
一言だけ。

ついやっちゃった。

人間界に行こう

カサッ

「本当に行くのかの？」

「ああ。リリ姉には悪いんだけどね。やっぱり爺の言ってた人間界つてのを見てみたくてさ。それに、ソル爺の故郷らしいし」

月明かりの身が照らす薄暗い部屋で会話しているのは二人の男女。

問うたのは、寝台に横たわる女性。

年の頃は二十代前半、月の光をそのまま持ってきたかのような金色の髪と、双眸。光を通してしまいそうな肌。

そして、この世すべての物を墮落させるかのような美を備えていると言って良いプロポーション。

答えたのは衣服を整えつつある男性。

年の頃は十代後半といったところであろうか。

女性ほどではないが、見て取れるだけで髪とは真逆にあるその肌色。何より特徴的なのが、その眼光であろう。

夜よりも濃い闇色の髪と双眸。

気だるそうに半開きにされたその奥で、煉獄の如く燃え盛る眼。それが彼を強く印象付ける。

「馬鹿親共に挨拶はしたのか？」

「親父にはリリ姉の次に話したし、父上には一昨日、父さんには昨日伝えた。ゼウっさんは心配してたけどね。みんな気をつけてだつてさ」

「ふう〜。ほんにそなたの親は・・・まあよい。して、わかって
いるのである？人間界において、わらわ達の力は一万分の一以下に
なるということ。そなたであれば、かつてヘルマンを選した赤毛
の男と同等か、それ以下となるのじゃぞ？」

「わかってるって、それくらいな。でもな、終わらない生で偶には
冒険がしたいじゃん？」

そういうと男は煙草を銜える。

「コイツのストックを万全だし。」

と、いつの間にか点った火で煙草を燻らせながら満足そうに言う。

「ならもうよい。とく行くがよい。帰ったら式じゃからな？そうだ。
いっそのこと側室の一人二人連れて来い。うむ、それがいい」

「へーへー。りょーかい」

女性の方はもう諦めがついたのか帰った後の話をしながら目を輝か
せている。若干暴走しているようだが、男性は慣れた様子だ・・・

「つと、そろそろ時間だ。ソル爺たちが現界のための穴開けてくれ
てるから行くわ」

吸い終わったであろう煙草を黒い火で消し去りながら告げると、部
屋から出ようとする。

「ヴァン！」

「ん？」

「いってらっしゃい」

「！！・・・いってきます。リリ姉」

振り返り出立の言葉を告げる男は満面の笑みを浮かべていた。
送り出す女性が見惚れるほどに。

女性の名は『リリス』

彼らの住む世界はこう呼ばれている。
『魔界』と

爺様の後始末（前書き）

皆さんこんにちわ。

ネコヌマでございます。

今回から人間界編（というよりも本編です）がスタートします。
開始時期は原作開始約10年前となります。

では、御覧ください。

爺様の後始末

「坊。よいか？何度も言うようじゃが、向こうでは坊の魔力は一万分の一以下に抑えられてしまう。ここまではよいか？」

「わあゝったってソル爺！俺ももう650歳よ？500かそこらのガキじゃねーんだから、五回も聞かされりゃあハッピーのガキだってわかるっての！！！」

「まったく、何時までもガキ扱いしやがって。」

「フオフオ。わしの三分の一も生きておらん小僧っ子が何を言うか。第一、650など、わしゃあまだ人間だったぞい？」

「ハイハイ。さすがは『叡智の伝道師』今じゃあ立派な人外だもんなあ。んで？ほかに何かあんだろ？ゲートに乗る直前に呼び止めやがってよお」

「うむ。二つあるんじゃが。まず一つ、人間界におりたら直ぐに『ペイン』を使うのじゃ」

「はあ？？？なんでまた・・・！！！！っていうかあっちで『ペイン』使えんのかよ！？」

「何をいまさら・・・よいか？『ペイン』はそもそもお前の固有技能のようなもんじゃ。人間界だろうが、真界だろうが使えんはずないじゃろ？まあ、普段よりは質は落ちるじやろうが、な」

「つてもよお。何つかやあいんだ？」

「『グリード』じゃ」

「はあ！？？おいおい、俺は伯父貴みてえに金なんぞだせねえぜ？」

「馬鹿もんが！まったく・・・よいか！？人間界におりたならば、わしらが悪魔だということを知られてはいかんのじゃ。面倒だからのう。よって『グリード』を使い”増やす”のじゃ。これはわしらの中で、わしと坊にしか出来んが、まずはせんじやろうて。」

ここまで言えばわかるな？」

成程ねえ。そりゃ、俺とソル爺しか出来ねえわ。
むしろ聞いてなけりゃそのこと忘れてたな。

「わかった。あと一つは？」

「それなんじゃがのう。これは『十二会』からなんじゃが、人間界にいる『ブレンド』を可能ならばこちらに連れてくることじゃ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・可能ならな」

またしちめんどくせーこと頼みやがって。

ヤハさんだな。ぜってーこんなこと言い出すのはヤハさんしかいねえ。

・・・・・・・・めんどくせえ・・・・・・・・

「うむうむ。物分かりのいい孫でわしは嬉しいわい」

「そうかい」

「それでは、そろそろ行っておいで。人間の使う”気”というのに
は気をつけての」

「んん？ オド以外の生命エネルギーだったか？ まあわかった」

「カカツ。よく学んでおるわい。それならば何の心配もいらんのう。
結構結構」

「よく言うぜ。師匠？」

まったく、自分で修業付けてた癖によ。

「そーいやあよ、ソル爺」

「なんじゃ？ もうホームシックか？」

「ちげーよ」

「ではなんじゃ？」

「ソル爺の孫弟子によ、馬鹿デカイ箱庭創ったヤツいたろ？」

俺が生まれる500年くらい前だったか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・アンセムのことかの」

「ああ。そいつ確か”魔力を書き換える”能力を取り込んだよな。それってよお、人間には過ぎた力だと思わねえか？」

「しかしのう、それくらいは良いのではないかと思うがの」

「そうか？現に人間界に召喚された奴の話聞いとるとよ、年を経るごとに傲慢になってるらしいぜ？そいつら」

「！！！！・・・・・・・・・・・・・・・・受け継がれておるのか？」

「ああ。言ったろ？”取り込んだ”ってよ」

やれやれ。

ソル爺はやっぱ気にしてなかったか。

基本マッドだしなあ・・・・・・・・親父と一緒にで。

そもそも、その能力ソル爺が暇つぶしで作ってあったのを弟子が持ち出したんじゃないかったか？

少しは気にしよーぜ？ほんとによお。

そもそも、今回の人間界行きだって、その始末が理由の三分の一は占めてんだぜ？

孫の心、爺知らずとはよく言ったもんだぜ。

「して、どうするつもりじゃ？」

「決まってるんだろ？爺様の後始末は孫の仕事ってな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すまんのう」

「気にすんな」

そうだ。

これは俺が勝手にやること。

ソル爺は知らないかもしれないが、奴らに還されてきた悪魔は体に何かしらの影響が出ている。

どれもこれも十年程で消えるような影響だから、みんな気にもしないが、俺には許せるようなもんじゃねえ。

今はその程度で済んでいるが、人間の進化ってやつは侮れないものがある。

だからこそ今のうちにその禍根を断たなきゃいけない。

「つと。長くなったじゃねえか。俺もう行くぜ？」

「ふおっふお。そうじゃな。では、な。」

「ああ。次に会うまで元気にしてろよ？親父たちにもよろしく言っ
といてくれ。じゃあ言ってくる」

「うむ。行って来い」

行ってくるぜ……みんな。

目の前が急に暗くなると同時に、俺の意識は遠くなっていった。

<爺side>

「行ったか」

ほんに、よくまああそこまで立派になったもんじゃ。

師匠として、何より爺としてこんなうれしい事はあるやあせんわ。

まあ、唯一難をあげるならばベルに似すぎたところかのう。

もう少し勤勉になると思ったんじゃが．．．．．反面教師作戦は失敗だったかの。

まあよい。

わしは、坊に無用の気遣いをさせてしまったようじゃが、そのようなことにせんでもよいと思っておる。

ただ坊が無事に帰ってくればそれでよい。

これは、真界の総意でもあるのだから。

「坊。御無事での．．．．」

さて、そろそろ帰らねばバアルたちの愚痴が増えるやもしれぬ。とく帰るとしよう。

<爺side out>

<???side>

「はあはあはあ．．．．．はあはあっ．．．．．くっっ！！」

ワカラナイ

ドウシテムラガモエテイルンダロウ

ドウシテオトウサントオカアサンハコゲクサイノダロウ

ドウシテアノシラナイオジサンガハナツヒカリハイエヲモヤスノダ
ロウ

ワカラナイワカラナイ

ドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテ

ドウシテメノマエノオニイサン・ハカナシ・・・ソウ・・ナン
ダロ・・ウ

<??? side out>

俺が人間界において初めて嗅いだ臭いはヒトのやける臭いだった。
初めての音は悲鳴で、初めての光景は慟哭の空。

争いなら理解できる。

戦争もだ。

しかし、

「こりゃあねえだろ」

目の前に広がるのは虐殺。

よく見ると、魔法使いが数人一方的に蹂躪してるだけじゃねえか。

「おいおい。人間ってのも中々にトンでるじゃねーか。見ると聞く
じゃ大違いっ、てのはよく言ったもんだぜっ」

ああーあー。片方は魔法使いじゃねーんじゃねーの? せんせーがた
よお。

「!!!!!!!!!!!!!! っ!!!!!!!!!!」

なんでこんな中にガキがいんだよ!?

って、おいおい・・・こいつ『ブレンド』か?

なんか混じってr

「おい!!! 悪魔の子はいたか!?!?」

「いや。みあたらねえな。大方もうくたばっちまったんじゃねーか?」

「ふむ。それもそうだ。よし!! 後は村全域に広域殲滅魔法を使用し撤退する!!!!!!」

「「「はっ」「」」

ってマジかよ?

言われたとおり『グリード』使ったから俺の存在はばれちゃいねえけど、このままじゃまずいな。

「お・・・・・・・・・・ツチッ!!!!!!」

こいつ気絶してやがる。

仕方ねえ。

連れて逃げるか。

よくわかんねえけど『ブレンド』みてえだしな・・・儘ならねえなあ。

どうも悪魔がどうか言ってたな。

俺が来る前ってことはこいつか?

まあいい。

こいつが起きたららのんびりと聞くとするか。

はあ。

りり姉。人間界は面倒くせえよ。

爺様の後始末（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

今回より本編開始でございます。

ですが、なんと言いか触りみたいな感じになっちゃいましたね。

最後の方で接触した少女が今作品のメインヒロインの一人です。

今後もう一人出てきますが、最終的にそれ以上増えることはありません。

たぶん。

ここで、今回の補足を。

と、思いましたが今回の話に関しては多分にネタばれを含んでいるのでスルースキル全開にしていたけると幸いです。

作者の目標は”二次創作で原作より早いネタばれ”という伊集院自重！！な感じのことなので、それはいやーという方はターンライトですね。

別にいいんですけどね？

父親人柱フラグ立ってんじゃないかね？とか言っても。

っと。

脱線しましたね。

では今回読んで下さったあなたが次回も読んで下さるようによろしくおねがいします。

悪魔と少女（前書き）

皆さんこんにちは。

ネコヌマでございます。

今回はメインヒロインの少女とのお話です。

なぜ村が・・・とかの説明も入るかとは思いますが、世界観が伝わりやすいようにするためなのでご容赦ください。

長くなりましたが、第三幕始ります。

悪魔と少女

連れてきたのはいいんだけどよお。

ぜんっぜん起きる気配がねえな。この嬢ちゃん。

まあギャーギャー騒がれないだけましか。

んー。とりあえず、嬢ちゃんが起きるまでこのあたりの把握でもしとくか。

んじゃまあ、知識の増幅つと。

「『グリード』」

あー、なるほどねえ。

昔ソル爺が住んでたあたりに落としたってとこか。

そんで、現在では中東って言われてる地域、と。

紛争、まあ小競り合いか、が多発する地域か。

ほうう。

あの魔法使い連中、やけにデカイ魔法使ってやがったが……そういう見か。

詰まるところ、紛争だかゲリラだかのせいにしちまえばいいと。

なかなか小狡ことしてんじゃねーか。

ま。人間にしては、ってとこだがな。

その程度じゃ真界じゃガキの頃に出来るレヴェルだな。

つと。『グリード』で増やせんのはこのくらいか。

あとはこの嬢ちゃんに直接聞かねえとさすがにな。

それにしても……………

確かにこの嬢ちゃんからは『ブレンド』っぽい気配はする。
だがなあ、なんて言ったらいいんだ。

こう、薄いつつーのか？

安定してねーつつーか？

んんー。

なんかに似てるんだよな。

「んんっ」

ん？

「目え覚めたか？嬢ちゃん」

「っ！……！！誰！？おとうさんは？おかあさんは？」

うわっ。起きていきなりかよ。

はあああ。

めんどくせえ……………

「ねえ……！！答えてよっ……！！……！！」

ったく、しゃあねえな。

あー。触んなきやいけねえんだったか。

「おい、嬢ちゃん。動くなよ？」

「ぐうっ……！！あっ……た……まっ放してよっ……！！」

「『スロース』」

「えっ、あ……………」

「どうだ？落ち着いたか、嬢ちゃん」

「あ、うん。大丈夫、です」

まあ、そりゃそうだろう。

『スロース』使って”理解した”と”落ち着いた”って結果を持ってきたんだからな。

ああーだりい。

『スロース』はこの倦怠感が嫌なんだよなあ。

そもそも父さんが普段ヤル気ねーのはこの力のせいだしなあ。

なんたって『スロース』のオリジナルは常時展開されてる副次的な作用でさえ”最善の未来を引き寄せる”なんつー馬鹿げた代物だからな。

そりゃヤル気も失せるわ。

俺のみてえなレプリカじゃこんなもんだろ。

「んで、だ。大体状況はわかったか？」

「うん。何だかわからないけど、わかったと思う」

「そりゃ結構。で、だ。俺は嬢ちゃんに聞きたいことがある」

大体の見当はついてるがな。

「悪魔の子ってのは嬢ちゃんって合ってるのか？」

「うん……」

「その眼のせいかな？」

「うん。おとうさんたち以外の人はこの眼を見て、悪魔の子だって……」

そりゃそうだろうよ。

なんたつて”蒼い眼”だぜ。

『グリード』で把握した限りここらは『アッさん』の宗教圏だったか……

……昔仲悪かったつってたなあ。そういやあよお。

そいつは確かにその手のやつらしちゃあ悪魔の子だわ。
うん。

「じゃあよお。そいつで何が視える？」

「ええと、遠く。あと……」

「ん？どしたあ、じろじろ見て」

「おにいさんの体から、少し……黒いのが見える」

あー了解。

本質を見抜く眼……ね。

あと、遠視。多分これは副次的なもんだろうな。

あの村にゃあ他に気配はなかった、つてことはコイツの親のどっちかってこともねーと。

てことは……大隔世か。

となると……昔現界したことのあるヤツで、当てはまるのは……と。

……プルソンとこの中位のヤツだったな。

確か200年くらい前に、戯れで人間と結婚してたって話だったけどよ。

それが、眼として現れたってどこか。

それにしても、やっぱ『ゲヘナ』は漏れちまうか。
”増やして”んだから、仕方ないっちゃ仕方無いけどよ。

とりあえず、『コキュートス』で誤魔化せるか試してみるか……

「嬢ちゃん。これでどうだ？黒いのは見えるか？」

「……………！うん。おにさんが煙草を吸いだしてから見えなくなった……………」

「そうか」

「ねえ、どうして？」

さて、どう答えっかな。

でも、ソル爺にも言われてっからなあ。

よし……！

ぶっちゃけるか。

「まず、だ。嬢ちゃんは悪魔っていると思うか？」

「いる、と思う。何回か羽根の生えたのとか、角の生えたのとか見たことあるから」

ほう。

「そりゃあ結構。で、俺がその悪魔。さっき視えたのは『ゲヘナ』

つつし、まー、俺の能力？みたいなもんだ。煙草吸って見えなくなったのは、こいつにそれを抑える作用があるからだ」

「でっ……………！でもっ……………！他は普通の人と変わんないよ！？角だって、牙だって、羽根もないよ……………！！……………？」

「ふ……………っ。そいつは思い込みってやつだぜお嬢ちゃん。聞いたことないか？『神は自分に似せて人を創った』ってよ。悪魔も高位になりゃ成程ニンゲンってやつと変わりねえのさ」

「そ、そんなのすぐには信じられないよ・・・」

だろうな。

「で、これからが本題だ。嬢ちゃんにもその悪魔の血が入ってる。

少しだがな。それを、俺の国じゃ『ブレンド』って呼んでるんだが、俺らんとこで嬢ちゃんみたいなのやつらを保護することになったわけだ。勿論すぐについてわけじゃねーし、無理矢理でもねえ。嬢ちゃんがニンゲンとして生きたいって言うんならそれでもかまやしねえよ。おいおい決めりゃいい」

「わた・・・しに悪魔の血が？どう・した・・・ら」

さすがにこんなガキにやまだはえーか。

まあ、ここらへんどうせぶらつくしな。

ついでだ。

「なあ、嬢ちゃん。俺はしばらく旅でもしようと思うんだが・・・来るか？」

「いいの？」

「どうせ俺は悪魔だしな。かまわねーさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いく」

「ああ。よろしくな嬢ちゃん」

「マナ。マナリアルカナ」

「？ああ名前ね。じゃあ、俺も名のんねーとな。俺はヴァン。ヴァンⅡⅤⅡベールだ。改めて、だ、嬢ちゃん」

「むう」

くくっ。

さあーで、どこ行くかねえ。

とりあえずは嬢ちゃんの教育でもしますかね。
むうむう煩くて仕方ねえ。

「「ぐうう」」

まずは飯だな。

はあ。金どうすつかな。

悪魔と少女（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマでございます。

今回補足らしいの特にないんですよ。
本文が説明だらけになってる感……
きつと違う。心が叫んでる。
うん

で、では次回もよろしくお願いします。

悪魔と旅して、交差して（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマという名のヌコでございます。

今回は、前回の後の主人公たちという形でいきます。

内容として、また独自設定のオンパレードになるかと思いますがご容赦を。

では、始まります。

悪魔と旅して、交差して

<3 side>

ヴァンとマナが出合い、行動を共にするようになり二年が過ぎた。基本的に面倒事が嫌いなヴァンは、事あるごとに『スロース』を使い強制的に”理解した”という状況を作り上げていた。そのせいもあってか、マナはその年齢の子供よりも遙かに大人びた性格となった。

それもそのはずで、子供が子供らしい要因なのは”何故？、何で？”といった”疑問”もしくは好奇心の塊だからである。

それ故、それらの要因を強制的にとはいえ理解させられているマナは、通常よりも遙かに駄々をこねることが少ない、物静かに映るのだ。

ただ、甘えるといった行為はこのくぐりに当てはまらないようだが・
・・・・

さて、ヴァンがこの二年間でただひたすら少女の子供らしさ撃滅作戦のみを行っていたかという点、そうではない。

むしろヴァンは、旅の中で”悪魔とは何か”を少女に教えてることに力を注いでいたといえる。

それは、真界における統括組織『十二会』から下された命令であり、『ブレンド』という人間界において非常に危うい存在である少女を慮っての行動であった。

もっとも、ヴァンの性格からして素直にそれを伝えることはまだないだろうが・・・・

今日も今日とて彼らは旅を続ける。

基本的に彼らの旅は、ヴァンが所有する車での移動が多い。

その車はヴァンが『グリード』で増やした知識で人間界にあるものにカムフラージュされており、魔法使いであったとしても見分けることが不可能なものだ。

実際は車内？には現在の魔法使いたちが千年の時間を費やしたとしても届かない叡智が詰まっているのだが……

「ねえ、ヴァン」

「んあ！？なんだ？」

「いつも思うんだけどさ、この車っておかしくない？」

「どこらへんがだよ？」

「だって、この車、車なのは見かけだけで中はマンマ家じゃない！！？？」

「ああ？あっちじゃ普通だったぜ？」

どこがおかしい？とでも言いたげなヴァンの様子に、マナの褐色の肌にうつすらと青いものが浮き立つ。

「だあーかーらあ！！なんでそんなのがふつうなのさ！！？？」

「ん？言ってなかったか？あっちじゃ、こんな風にちんたらカビの生えそうな速さで移動してつと、十年二十年かかるところもざらなんだよ。それに、移動中にはらあへったりだるくなったら大変だろうが」

「そ・・・そんな広いの？」

さっきまでの青は鳴りをひそめ、あまりに斜めな返答にマナも困惑しているようだ。

むしろ、怒りよりも好奇心が顔を出し始めたと言っているだろう。

「まあな。人間界っーか地球か。ざっとこの十倍はあるだろうな。それも表層だけでな。最下層まで含めちまうと百倍はあんじゃねーか？」

「じゃ、じゃあ、どうやって移動してるの？」

「まあ、それぞれ、としか言いようがねえな。飛んでくヤツもいるし、幻想種に乗ってくヤツもいる。俺も大体は幻想種に乗ってくしな。それに、時間がかかってもいいヤツはこんな感じで移動してんなあ。ま、それでも重要個所には転移陣もあるし、特に問題ねえよ」

マナは、先ほどの興味がここまで大きな情報と呼んでしまったのかと呆然とするが、そもそも彼らが悪魔であるということを出し、人間の常識が当てはまらないのだと再確認した。

「そ、そうだね。長生きなんだもんね・・・」

「馬鹿が、死なねーんだよ。何回言ったらわかんんだよ・・・」

と、マナを小突いた。

「あ、ちよつ。また『スロース』使ったでしょ？それ、頭痛くなるんだよ？」

「だから、叩いてんだろうが。そもそも、言葉にしてねえから大して痛くねえだろ？」

「あー、えーつと、ことたま・・・だっけ？」

「惜しい。言霊だ馬鹿」

「バカバカ言うな！！！！悪魔！！！！」

「へーへー。仰る通り。んで？」

「ぐうぐう……言霊……声に出すことで、自分と周りを一体化させて、物事を好き勝手しやすくするために必要なこと……だっけ？」

「まあ、そんなとこだ。魔法使いが詠唱すんのは、世界にあふれる”マナ”にテメエの”オド”を駄賃代わりに払ってパシらせる為に必要だからだ」

「え、と、よくわかんないんだけど？」

「あああゝ！！たたくめんどくせえ！」

ガシガシと頭をかくと、煙草を咥え一息。

その間、かってに火がついたことにマナは何も言わない。きつともう慣れてしまったのだろう。

「……ふうふう。わかりやすく、わ・か・り・やす・く……！！言うのだな。つまり、”マナ”、精霊でいいか。こいつらは普通人間の言うことなんかきかねえんだわ。じゃ、どうすりゃ聞いてくれんのかっていう話になるわけだ。ここで出てくんのが詠唱だ。詠唱ん中に出てくんだろ？ソドムがどうか、高殿の王とかな。で、その名前を使って精霊に言うわけだ「ちよつとあそこら辺焼いちゃってもらっていいっすかね。あ、ソドムさんの方には話しておいてあるんで。これ、少ないっすけど依頼料っす。ええ。じゃ、お願いしまゝす」てな感じで。勿論、名前使った分も相手の位に応じて”オド”精霊に持ってかれるからな。わかったな？わかったよな？うし！おわりー」

「はあーい！！……って！！じゃあ、ソドムとかはほんとにいるってこと！？」

ふう、と煙を吐き出すとヴァンはマナを一瞥し、新たな煙草を咥える。

その際、先ほどまで吸っていたものは灰も残っていない。

ヴァンは、煙を楽しむかのように煙草をふかし、クイツと後ろを顎でしゃくって見せる。

マナは納得のいかなそうな顔をしながらも振り向き後ろを確認し・・・確認し・・・悟った。

後部座席のある場所にはリビング。ここまではいつも通りだ。ソファに寝そべる二匹の仔犬。自分はクロとギンと見たままの名前で呼んでいたが、ヴァンはどうだっただろう・・・と。

確か・・・クロをソドム、ギンをゴモラと呼んでいなかっただろうか。

この瞬間、マナの旅における癒しが減った。
様な気がしたという。

「（見た目は仔犬、中身は怪獣・・・か）」
このときマナが思ったことは奇しくも、某死の配達人、ラッキースケベな年齢詐称高校生のセリフと酷似していた。

<3 side out>

さて、マナにこっちのことを触り程度は教えた。

ただ、まだどっちで生きるのか決めるには早すぎんだろおなあ・・・

それに、人間と生きてきた年数が全然たらねえ。

だから、『ブレンド』の危険性ってやつをいまいち理解できてねえ

こればっかは『スロース』でも無理だろうなあ。
 そもそも実感つてやつが足りてねえんじゃあよお。

いつそ人間に預けてみるか？

それ魔法使いの奴らに……いいねえ。

そりゃあいい。

それも正義なんだとか言ってるやつがいるところだとなおいい。大体正義なんて今どきエルの野郎だつて使つてねえぞ？

人間ってのは難儀な奴らだぜ。まったく。

よし、決めた。

こないだ見かけた魔法使いの奴らに預けちまおう。
いい加減俺もやることやりてえしな。

どこにいのかねえ。

アンセムの血脈は。

と、その前に。

「マナアこないだ魔法使いの連中いたろ？」

「へ？　．．．何？　急に」

「そこにお前預けっから」

[illegible]

「うるせえ馬鹿!!!」

あー！！！！耳があー！！！！俺のミミガー

つとふざけてる場合じゃなえな。

「決定事項だ！！！！十年以内に会いに行ってやつから、それまでど
っちで生きるか考えとけ！！！」

「でっでもっ！！！！！！！！そn「『スロース』」ずるい・・・・・・わ
かった。十年以内だね・・・・・・」

「わかりゃあいい。ついでに耳かせ。「えっ？」いいからかせ「う、
うん・・・・」ほいっと【ブツツ】「いたああああ！！！！！！！！」うる
せえ『スロース』いいか？それはお守りだ。悪魔からお守りっての
も変だがな？それをつけてる限りお前になんかありやわかるし、居
場所も大体分かる。それと、そいつは魔力を込めてさわりや見え
なくなるからな。学校だかなんかで見えてちゃまずい時は消しとけ。
わかったな！？」

「・・・・・・うん」

我ながら過保護なんじゃねえかとも思ったがな。

俺の血も垂らしといたから、火避けにもなんだろ。

まあ、情でもわいたのかね。

こっち来てずっと一緒だったしな。

「ま、すぐにつてわけじゃねーよ。あいつらが見つかったら、だか
らな？」

「うん！！！」

「結構。じゃあソドム達に飯」

「やっぱり・・・・・・・・」

「ん？なんか言ったか？」

「っっ！！なんでもない！！」

へんなやつ。

悪魔と旅して、交差して（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマという名の何かです。

今回では、当作品においての魔法の解釈を説明させていただきました。

今後、この設定が原作キャラの能力などに絡んでいく予定なので、なるべくわかりやすく書いた次第です。

わかりにくかったのならば、それは『ネコヌマという名の何か』だからしかたない、と思ってください。

さて、次回よりついに原作突入？です。

最後の方にちよびっと、の感も否めませんが。

八年はすっ飛ばす予定です。

某ピエールさんもびっくりな感じで飛ばします。

そんなわけで、次回もよろしく願います。

悪魔と学園（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマという名のニュコでしゅ。

今回より原作に突入いたします。

と言ってもまだ野菜君には絡みませんが。

もう、ヒヤッハーで最高にハイってやつを演じなければネコヌマの文章力じゃ限界が・・・・・・

とにかく、最低限誤字脱字の内容にいたしますのでよろしくお願います。

では、始まります。

悪魔と学園

『ブレンド』

魔族、若しくは神族の因子が、交配・禁呪・加護・突然変異などの要因により人間と混じり合った存在。最も有名なのはハーフデモン。これは、神族よりも魔族との交配などが多い、というわけではなく神族の因子は非常に人間に認知されにくいものだからである。反対に、魔族の因子は非常に感知されやすい。

また、彼らは総じて通常の人間を逸脱した力を持ち人間界においては異端視され利用されることが多い。

何かしらの処置を施すことができるのは真界にすむもののみ、よつて発見次第可能な限り真界に勧誘するべし。

真界最高評議會「十二会」

< 3 side >

マナを預けるとヴァンが決めてから、二日過ぎたころには魔法使いの一団と合流することができた。

ヴァンがマナについて”紛争に巻き込まれて家族はおろか村も全滅し、天涯孤独の身だ”と説明すると、不憫そうな表情をした後、嬉々として引き取ると言ってくれた。

合流してからは情報収集のため、それから数日ほど彼らと行動を共

にした。

その間何度か戦闘もあったのだが、ヴァンにとって重要だったのは、一度だけ出くわした悪魔との戦闘だった。

それは、悪魔と戦う際魔法使いたちは憎悪の目で悪魔たちを見ていたことだ。

召喚された悪魔は下級もいいところでどの眷属かもわからないほどであったが、やはり気分は良くないらしく、離れた場所で見ているヴァンの姿があった。

もつとも、気分が悪い原因は魔法使いたちであったが。

ヴァンは結局数日ほどして旅に出て行った。

出立の際、マナに何か強請られていたようだったが……

それからの五年間、ヴァンは『ブレンド』の搜索を行った。

これは元からの目的ではないが、マナという前例と任務としてのことも考え、面倒事を先に済まそうという考えであった。

結果は芳しくなく、むしろ皆無といってもいい内容であった。

そもそも、一神教圏内では『ブレンド』の様な存在は忌避されており殆どが『ブレンド』と判明した際に殺されていたのだ。

そんな中でマナのような事例は例外中の例外といえよう。

しかし、搜索の旅も決して無意味だったかと言えばそうではない。

旅の途中では様々な出会いがあった。

なかでも、ヨーロッパで出会ったジプシーの一人は中でも一番の出会いだった。

彼らはケルトの失われた法を探しており、その途中で得た多くの情報をヴァンにもたしらしてくれた。

ヴァンはその見返りに自分の知る限りのケルト魔術の法を彼らに教

えた。

因みにだが、ヴァンは魔法を使えない。

これはヴァンに限ったことではなく、真界に住む殆どの者がそのようなのである。

そもそも彼らが使っているのは、自身の固有技能であり、他者から力を借りる魔法のような術を用いることは、まずあり得ないのだ。

ヴァンが教えたのは650年の中で教えられた知識に基づいてのアドバイスと戯れに覚えたものだけである。

しかし、ジプシー達にとってはそうではなかったらしく、えらく感謝されていた。

もつとも、ヴァンにしてみれば大した事をしたわけではなく、むしろ得られた情報に対する対価が足りないのではないのかと恐縮していたくらいだったのだが……

それほどに、彼らからもたらされた情報は大きかった。

一つは、世界には隠されているものの魔法使いの住む場所があるということ。しかし、そこに住んでいるものはよそ者を異常に嫌うので行くのはやめた方がいいということだ。

そしてもう一つ、日本にある学園都市というところには異常が集められているということ。なんでも、世界中と呼ばれている樹を中心に魔法使いが作った街だという。

そこは、魔法世界の評判は良いらしいのだが、ジプシー達のような、もともと魔法世界とかかわりのない魔法使い達にとっては狂気の沙汰に見えるという。

彼らが言うには、認識阻害の中に長期間いることで普通を普通と認識できない人間に育ってしまうのだそうだ。その為、そこで育った

おっと。そろそろ準備しとかねえとな。
とりあえず最善の未来でも視ときますかあ。

『スロース』

「ふう〜。だりい」

なるほどねえ。必要な外部の人間以外は結界に引っ掛かるようになってるわけだ。

それにここは学園都市。内部の人間以外が入ってくることは稀、と。つまり、ここを自由に歩き回んにはこん中で働いてる必要性があるわけ、か。

んで、ここで働くにゃあ学園長様の許可がいる、ねえ。

だりいな。

ま、車停めてそこら辺の公園でもぶらついてりゃ、あっちから来るみてえだし、そうすっかな。

はあ〜。どうなっかねえ。

<??? side>

「学園長!! 侵入者がいるというのは本当のことですか!？」
「これ、高畑君。そう騒ぐ出ない」

「は。失礼しました。何分こんな人の目の多い昼に侵入者が現れたと聞いて、少々動転していました」

まったく、高畑君は優秀なのじゃが何分まだ若い。

普段はもつと余裕を持っているというのに・・・まあ大方ネギ君がおるから神経質になっておるんじゃないかなあ。

「まあよい。それで先ほどの件なんじゃがな。確かに侵入者はおる。じゃが、橋を通して入ってきたことから敵対する意思はないようじゃ。それに先ほどからわしの監視に気付いておるようじゃしのう」
「なっ!!!!!!!!!!!!!!・・・危険性はないのでしょ
うか？」

「わからん。じゃから、それを確認するためにも一度ここへ連れてきてくれんかのう」

「・・・わかりました。今から向かいます」

「うむ。頼んだぞい」

ふむ。

いったい何の目的でここに來たのかのう。

監視に気付くということとは、それなりの実力者で間違いなからうて。あわよくばこちらに引き込めんかのう。それができずとも龍宮君のような形に持ち込んで、という手もありじゃな。

いったいどうなるかのう。

<??? side out>

はあ。

いい加減監視がうざくなってきたなあ。
まったく。人待たせんじゃねえよ。
悪魔だけだよ。

「ちよつと良いかい？」

「ああ？」

「僕はここで教師をやっている高畑というものだ。すまないんだけど、学園長が君に話があるみたいだね。僕に付いてきてくれないかい？」

やっとかよ。

まったく、悪魔嘗めすぎだろ。

はあゝ。寝てえ。

悪魔と学園（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマです。

結局原作にはあまり入れませんでした。
場所と、人物が出た程度ですね。

次回こそ！

何とかしたいと思います。

では、次回もよろしく願います。

悪魔と仕事（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマでございます。

今回より本編と徐々に合流ができてくるかと思っています。

自分中では今回が一番しんどかったのではないかと。

一番のネックは主人公の仕事でした。

悪魔ということと、自分の文才から考えて、これは・・・というものを選ぶのは意外に大変な作業でした。

まあ、自分の経験のあるものとかを基準にしてみたので、あくまでネコヌマ主観と思っていただければ幸いです。

では、始まります。

悪魔と仕事

<3 side>

学園長室までの道すがら、ヴァンは学園で何をするか考えていた。それは、自分が悪魔ということはばれないだろうが、うっとおしい監視からして明らかに不審人物として見られているだろうことを考えてのことだった。

しかし、その思考は唐突に終わりを告げる。つまり、目的地に到着したのだ。

【コンコンッ】

「入りなさい」

「失礼します」

そういった高畑に促され、中へと通される。そこでヴァンが見たものは一種のありかた。

「へえ。魔法使いつてのは総じて悪魔やらハーフを嫌う傾向にあると思ったんだが・・・なかなかどうして、面白いあり方をしてんなあ」

「なっ!!!!!!!!!!!!!!」

「これ!!! やめんか、高畑君!!」

魔法という単語を聞いた高畑が、すぐさま臨戦態勢に入るが学園長

によって制される。

「ふむ。すまんのお、高畑君は最近少々神経質になっておってな」

「なっ！！学園長！！」

「いや、気にしていない。こちらも不躰だったようだ」

と、ヴァンにしては珍しく敬語で返す。

それだけ今後ここで生活するということを真剣に考えているのだろう。

たぶんではあるが・・・

「さて、先ほどのことから君が魔法関係者であることはわかった。じゃが、その前に名前を教えてくださいませんか？」

「そうだな。俺の名は、ヴァンⅡVⅡベールという」

通常、悪魔などの真界に住むものはあまり名を明かさない。

それは名によっておこる面倒事を避けるためだ。

しかし、ヴァンの名は今のところにんげんかいにいられていない。

さらに、名自体に理解がなければどうということはないので素直に教えたのだ。

「フォッフォ。なるほど、ヴァン君じゃな。それで、じゃ。質問ばかりになるが・・・どこで魔法を知ったのかのう」

どこで魔法を知ったか。

実際には真界でだが・・・それでは大変なことになる。

それ故、ここはジプシー達の好意に甘えることにした。

「さて、どこと言われますと明言しかねますが、困った時に名前を

出すよう言われたところなら」

「して、それは？」

「はい。」霊樹の末裔”。そう言えば分かるといわれましたが」

その瞬間、学園長の顔がひどく険しいものになった。

「なんと！！！ふうむ・・・それで君はこの学園に何の目的で来たのかのう。ここには外部の者はあまり入ってこないのじゃが・・・」

「いえ、少々店でもやろうかと思ひましてね。喫茶店でもやろうかと思ひましたが、やはり若者の意見が知りたいと考えまして。では学園都市ならばあつらえ向きではなからうかと、愚考した次第」

しばし考え込むそぶりを見せた学園長であったが、逡巡ののち答えを發した。

「なるほどの。あいわかった。場所の方はこちらで準備させてもらおう。なにか、要望はあるかの？」

「では、大学などの近くに位置する建物で二階建ての物をお願いします」

「理由を聞いても良いかの？」

「ええ。一階部分は店舗とし、二階部分は住居にしようかと。あとは、夜にはバーの真似事でもしようかと考えていまして、それで未成年たちから離れた場所の方がいいかと思ひましてね」

「ふむ、では大学エリアの近くに以前、生徒が卒業制作として作ったものがあるので。それを使うといい。もっとも、内装は工事する必要があるじやろうが、それはこちらの方でやっておこう」

と言うと、学園長はどこからか先ほどまでの話の内容がまとめられた契約書を取り出した。

「では、これに間違いなければサインを」

ヴァンは、契約書の内容を確認すると、サインをした。

「ふむ、ではこれにて契約は完了じゃ。良い商売ができるといいの」
「ああ？ そんなのあんたの知ったこっちゃねえだろ？」

「「な！！！！」」

契約が終了すると同時に、これまでの丁寧な雰囲気から一変したヴァンの様子に驚きが隠せないようだ。

「ヴァ、ヴァン君！！その言いようは・・・」

「ああ？ なんか文句でもあんのかよ？ 契約の方は粛々と終わらせたりうが。それ以外にどうしろと？」

「し、しかしだね・・・」

「よいよい。そうじゃ、忘れておったが名乗っていなかったの。わしは近衛近右衛門という」

ヴァンは未だに納得のいかない顔をした高畑と学園長を一瞥すると、学園長室から出て行った。

<3 side out>

<学園長 side>

「学園長、よろしいので？」

彼が出ていってしばらく黙っていた高畑君は、そう切り出しおった。わしとてそのようなことはわかっておる。

本来であれば、警備員の仕事をしてもらうなり何なりして彼の人となりや実力を知る必要があるからのう。

危険因子は早めに摘む。
じゃがのう。

「高畑君。良いのじゃ、それに今後彼に手出しすることを禁ずる。これは、ネギ君を除いた全魔法関係者にも伝えよ。よいな!？」

「・・・はい。ですが、せめて理由を教えてくださいませんか？」

「ふむ、高畑君は西洋魔法使いの別称を知っておるかな？」

「? いえ、知りませんが・・・」

「別称、と言っても呼んでおるのは今ではごく少数じゃがな。かつては、外来魔法、そう呼ばれておった。勿論日本に限ったことではないぞい? 全世界的に、じゃ」

ふむ、ずいぶん啞然としておるようじゃな。

まあ、無理もないかの。

今では知っておるものの方が少数じゃからな。

「それは・・・どういう意味なのでしょうか？」

「そもそも、じゃ。現在西洋魔法と呼ばれておるもの。これは、もと旧世界になかった技術なのじゃ。もとは魔法世界で発達したものの、それがあつた時より魔法世界からこちらに伝わり、今に至るといふわけじゃ。その伝わつた場所が西洋、ヨーロッパだったことから西洋魔法と呼ばれておる」

「そんな経緯が・・・ですが、それと彼とは関係がないのでは?」

「まあ、最後まで聞きなさい。先ほど、旧世界になかつた、と言つ

たじやろ？では、それまでこちらの世界に魔法がなかったのかというところではない。それらは土着魔法・先住魔法などと呼ばれておる。もつとも彼らが謳っておるのは違うがの。君も聞いたことがある筈じゃ。魔術、これが元来旧世界にあった魔法じゃ」

「魔術・・・・まさか！！？？関西は！！」

「そのとおりじゃ。太古よりの神秘を用いる集団、それが関西魔術協会じゃ」

「では！！東西の確執はそんな昔からの勢力争いなのですか！！？」

「・・・やはり高畑君には寺にでも行って精神修養でもさせた方がいいのかのう。」

「高畑君、短慮はいかん。それでは半分といったところじゃ。そもそも、魔法使いと術者の決定的な違いは何か分かるかのう」

「それは・・・火力、でしょうか？」

「そうじゃ。そして、それこそが魔術師が魔法使いを嫌う原因なのじゃ」

「高畑君が言ったように我等魔法使いの特徴はその火力にある。広域殲滅魔法などがその最たるものじゃ。じゃが、その火力故周囲への被害は甚大なものとなる。対個人用とされる魔法の射手ですら、地を穿ち岩を砕く威力がある。それに比べ、魔術は周囲への被害をほとんど出さん。それどころか、周囲の自然を活性化させることすらある。彼らは自然の理に逆らわんのじゃ」

と、脱線してしまったの。

「で、ヴァン君のことじゃったの。これは彼、というよりも彼が出

した集団の名に問題があるのじゃ。” 霊樹の末裔” これは、ケルト魔術の神秘を追い続ける、魔術師たちの中でも最古に位置する集団のことじゃ。それ故ほかの魔術師たちにも大きな影響力を持つておる。勿論関西にもじゃ。そんなものたちの関係者に何かあったと知られれば、それこそ魔術師と魔法使いの間で戦争なんてことになりかねん。故に静観を、と言ったのじゃ」

「わかりました・・・では、魔法関係者への通達を行ってきます。失礼します」

やっと思ったかの。

出ていく際、少し表情が暗かったような気がしたのは気のせいではあるまい。

魔法使いと魔術師の違いと確執。

高畑君には少々堪える話だったのやもしれんな。

広域殲滅魔法・・・彼が憧れた英雄、千の呪文の男が好んで使った魔法。

そして、その男が多くの恨みをかう原因となったもの。

それに、高畑君はもう知っておるのかもしれないな。

サウザンドマスター（千の呪文の男）のもう一つの謂れ・・・
・・・
ザンドマスター（一度の戦いで”千の民を巻き添えにする”男）を。

それに高畑君には黙っておったが、彼に手を出さんのはもう一つ理由がある。

彼がもし本当に”霊樹の末裔”の関係者だった場合手を出せば、こ

の学園都市はまず間違いなく戦場になる。

なぜなら、ここには世界最上級の霊樹があるのじゃから……

とりあえずは静観。

これがもつとも間違いのない選択じゃろうて。

そういえば、彼は面白いあり方をしていると言っていたが……
はて、なんのことじゃろうな。

<学園長 side out>

さて、近衛からの監視もきえたみてえだし漸くのんびりだなあ。

店舗自体は以前からあったものを貸してくれるみてえだが、店舗が
使えるようになるには三日かかるみてえだ。

内装なんかの注文は簡単にしましたが、商売道具は自分で揃えねえ
といけねえな。

まあ、明日にでも買いに行つて店舗が仕上がる時にまとめて配送し
てもらやあいいか。

なんにしても今日はもう日も落ちてるし、明日だな。

車で寝ても良いんだが、魔法使いどもに勘ぐられても面倒だからな。
ソドム達に飯はやってあるし、宿でも探すか。

ん？

そういやあここに入ってからマナの気配がやけに強くなってんな。
ひょっとしてマジに学生でもしてるってか？

あいつと別れたのが八年前だから・・・十四か。

噂じゃ、スゴ腕スナイパーなんて言われてるみてえだが。

あのちんちくりんがどうなってんのか興味あるな。

ふむ。

呼んでみるか。

<??? side>

「♪」

「おい！！龍宮！吸うときは窓を開けろと何度言ったらわかるんだ」

？おっと、少し物思いにふけりすぎていたようだね。

「ああ。すまない、刹那。少々呆けていたようでね」

「まったく、別にそれが煙草じゃないということとは知っているから
止めろとは言わんが、少々匂いが甘ったるすぎてな・・・」

「ふむ、そうだったね」

「それにしても珍しいな。おまえがピアスを視えるようにしている
なんて」

「ふふ。そうかい？なんとなく、なんだけどね」

そう。なんとなくだ。

なんとなく、あの人のことを思い出しただけ。

あの人と別れてもう八年になろうとしている。

その間にいろいろとあった。

龍宮とファミリーネームが変わったのもその一つ。

龍宮コウキ

あの時私が預けられた団体、『四音階の組鈴』の一員で私にもっともよくしてくれた人。

そして、私のパートナーだった人だ。

もったも、恋愛感情はなかったけどね。

それはヴァンに出合っていたこともあるけど、彼の性質によるものが大きかったと思う。

彼は素晴らしい人間だと胸を張って言える。

ただ一点を除いて。

彼は悪を憎んでいた。

人生の、己の全てをかけて“悪を敵として倒す正義の味方”になろうとしていたのさ。

だからなのだろう。

悪魔と対峙するときそれは顕著だった。

周りの全てを度外視して、ただひたすらに悪魔をせん滅する。

それが連合には気に入ったのだろう。

いつしか彼は”マギステル・マギ”そう呼ばれるようになった。

”マギステル・マギ”と呼ばれるようになってから彼の性質は更に苛烈になっていった。

それは私の魔眼に対してさえ嫌悪を表すようになったほどだ。

多分、団のみんなは私にストッパー役を期待したのだろう。
魔眼持ちの私とうまくやれれば、彼の性質も大人しくなるだろうと。
ま、結局失敗だったけどね。

そんな彼も、四年前に死んだ。

公的には相手の攻撃から子供を守ろうとして死んだことになっているが、事実は少し違う。

彼は、人質に取られている子どもごと悪魔を殺そうとした。
それを咎められ、逡巡したすきに殺されたのだ。

その後、彼の葬儀に日本を訪れ、その時に彼の兄夫婦に引き取られ
今に至るというわけさ。

と、昔のことはこの辺にしないと。

それにしてもあの人は今頃何してるんだろうね。

私みたいなハーフ、ヴァンは『ブレンド』って言ってたけど、そんな奴らを探すって言ってたのは覚えてるけど。

うーむ。

そういえば、刹那はどうなんだろう。

本人には聞いたことがないけど、何か混じっているのは分かる。

聞いてみたいね。

「そうだ、刹那。今日の夕食はどうするんだい？ 確か、警備の仕事

もなかったはずだし外食でもするかい？」

「そうだな。確か”超包子”が営業を開始したと言っていたな。なら、夕食はそこでどうだ？」

超包子か・・・いいかもしれないね。

もちろんデザートに杏仁豆腐は欠かせないよ。

「問題ない。じゃあいkアツツー！！！！」

「ど、どうした龍宮！！？？」

なんだ？急に・・・

「いや、急にピアスが熱くなって・・・【おい、マナ。聞こえてんのか？】えっ！？ヴァン？【それ以外に誰がいんだよ？まあいい。今、麻帆良にいんだがどっか美味い飯屋しらねえか？】いや、知ってるけどなんだ【それは重畳。じゃ今すぐ案内しろ。俺は馬鹿デカイ樹のところにいつから。じゃ、すぐ来いよ？】えっ、ちょ、ヴァン？ヴァーン？・・・・・・・・・・はあ」

「お、おい龍宮、どうかしたのか？急に独り言なんて？」

「いや、念話みたいなものだよ。どうも私の待ち人が来たみたいだね。夕食の席は一つ増えそうだよ。とにかく早く世界樹広場に行こうか。あの人は待つのが嫌いだからね」

駆け出しそうになる体を押さえて身支度を整える。

八年ぶりか・・・ヴァンはきつとなにも変わってないんだろうね。なんとたって悪魔だしね。ふふっ。

「龍宮。なんだか楽しそうだな？」

「そうみえるか？」

「ああ。こんなに浮かれてるお前を見るのは初めてだ!!」

「そうかもね。なんたって・・・」

「なんたって？」

「ヴァンは私の運命だからね！」

そう言うとは刹那を残し世界樹広場へと急いだ。

八年ぶりの私はヴァンにはどう映るんだろうか。

<??.? side out>

おせえ。

悪魔と仕事（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマでございます。

さて、今回長めです。

二日にわたっております。

マナのこれまでとか、西と東の対立とか。

主人公が！！！！！！

次回は野菜君でるかな？

どうかなあ？

ちなみに、ヒロインですが……

ふた……いや……さんn

ふう。

まあ今言えることは、ネコヌマはツンデレが基本嫌いということ
です。

では、次回もよろしく願いします。

悪魔はそつと橋を架ける（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマでございます。

今回は前置きなしでお送りします。

では、始まります。

悪魔はそつと橋を架ける

・『紅き翼』に対する考察―1

ここ数年に起きた大戦は、魔法世界に多くの問題を引き起こしたことは言うまでもないだろう。

それは、オスティアの魔力消失現象然り、それによって引き起こされたオスティア難民然りだ。

それらは多くの研究者、または国家によって様々な対策が取られていることは周知のことであろう。

もちろんこの私もその例にもれず、戦史の研究者として様々なものを見てきた。

そのために様々な場所に行き、様々な論文も見てきた。

そんな中だ、私は違和感に気付いてしまった。

それは、この大戦の功労者であり、英雄と呼ばれている『紅き翼』に関することだ。

彼らは確かに英雄と呼ばれる存在なのだろう。

しかし、マスメディアにも、大衆向けの三文ゴシップ誌にすら彼らを批判する文章がないのは一体どうしたことなのだろうか。

彼らに恨み、もしくはそれに近い感情を抱いている人物はかなりの数がある。

それは、被災地を多く回ってきた中で体感したことだ。

ここで、被災地とひとくくりにしたが、それらは主に大戦後に起きた紛争のことだ。

これは、大戦において市街戦があまり行われなかったからではない。少なからず行われた市街戦は、舞台となった場所がことごとく消滅

しているからだ。

市街戦の行われたとされる時期は記録が正しければ大戦の初期と思われる。

これは、奇しくも『紅き翼』が大戦に参戦してきた時期と重なることを明記しておこう。

さて、本筋に戻そう。

先ほども言ったが、伝聞としての形での批判。それは被災地に行くことで聞くことがある。

しかしだ、その場所から一步離れると彼らに対する批判は、一切聞こえなくなってしまう。

さらにおかしなことに、先日私が訪れた被災地が、今朝隔離指定地域になったのだという。

先日と言っても、ほんの一週間前のことだ。

そんなわずかな時間で隔離されるほどの何かなど起こりうるはずがない。

極めつけは、彼らに対して批判的だった被災地すべてが何らかの理由で隔離指定、若しくはそれに近い状態にされていることだ。

これは明らかにおかしな事態としか言えない。

そもそも、何故彼ら『紅き翼』は大戦に参戦したのであるのか？

どこからともなく現れ〜などと言うのはお伽話の世界でしかあり得ないことである。

本当にそうであるならば、彼らは帝国を明確な敵と確信していたことになる。

しかし、結果として大戦の敵は第三勢力であつたはずだ。

それにしても、

「おせえ」

全く、俺を待たせるなんざ五百年早え。

「ふう~~~~。はあ~~~~」

ったく、これで何本目だ？

人間界にあるやつだったら足元大変なことになってんぞ？

それに、だ。

この尋常じゃねえ大きさの樹はなんだ？

感じからすると、『真界』ある樹と同じような気がするが……
にしちゃあ、小せえな。

大方、誰かが種でも落としたんだろうが、よくこんな”マナ”の薄
いところで育ったもんだ。

しかも……

こりゃあ、どっか別の場所の”マナ”まで喰ってんな。

いやいや、まったく。

流石、といか言いようがねえな。

やっぱ見ると聞くじゃ大違いだな。

っちー!!

『コキュートス』も『アンテノラ』じゃ足んなくなってきたな。

そもそも、人間界にきて以来全力で解放したことなんてねえからな・
・・・・・

このままだと『グリード』で”増やした”まんまの体じゃもたねえな。

その内一度戻る必要があんな。

取り敢えずは『トロメア』に変えて、と。

『ジュデッカ』までいったら真剣に考える必要があるな。

「ヴァーシーン!!」

うおっ!!

<sideマナ>

私は今、柄にもなく興奮している。

隣にいる刹那はまだ気付いていないだろうが、私にはわかるんだ。
この甘ったるい空気、そして近づくにつれてほんの少しずつ下がる

温度。

世界樹広場まであと少し！！！！いた！！！！

肩にかかるか、かからないかの長さの癖毛。

真っ黒なスーツ。

ヴァンだ！！

そう思うと私は人目も気にせず抱きついていた。

「ヴァン！！」

「マナか？」

「そうだよ」

そんなにじろじろ見なくたっていいと思うんだけど。

「マナ。”増えてる”みてえだが、どうかしたのか？」

「ちよつとあってね。ヴァンに聞かせるほど大したことじゃないさ」

「そうか」

「ああ」

なにも聞かないんだね。

ヴァンらしいよ。

にしても、昔と全然変わってないね。

流石悪魔と言っかなんというか。

「マナ」

「な、なんだい？」

そんなまじまじ見て。

「綺麗になったな」

え？

「ヴァン、今なんて？」

「だから、綺麗になった」

嬉しい。

はしゃいでいた自分。

認めてほしい自分。

嬉しい。

求めていた自分。

走っていた自分。

全てがここにあった。

だから。

「ありがとう・・・ヴァン」

「ったく。泣いてんじゃねえよ。馬鹿が」

「ふふっ。これは責任をとってもらわないとね」

「側室でよけりゃあな」

むう。

そういえば、向こうには婚約者がいるって話だったね。

「それに、こっちに来る気があるなら、だがな」

「それは大丈夫だよ。あれから、世界中回っているろ見て、考えたからね・・・ココを卒業したら直ぐにでも」

今のクラスは気に入っているしね。

そのクラスもあと一年で解散だし、惜しくはない。

「そか。じゃあ期待にこたえねえとな」

「え？んむう・・・」

言うなり、私はヴァンに奪われた。

同時に、私の口内に熱いものが流れ込んできた。

しばらくすると、口内がとても甘い。

甘味なんて目じゃない甘さが口内を蹂躪している。

どれくらいたったのだろうか、いつの間にかヴァンは私の唇から離れていた。

目の前のヴァンとの間には赤い光る橋があった。

それを見て、私はようやく理解した。

口内に流れ込んできた熱いものの正体を。

「ヴァ、ヴァン？これって……」

「ん。まあ加護？みてーなもんだ。大体今ので七割くらいになったと思うが、ピアスの効果で二割程度に誤魔化せてる筈だ」

「そうじゃなくて、何で血？」

「ああ。ほんとはお前の本流のが一番かも知れんが、そうになると俺が面白くねーから。つうか、嫌だったのか？」

「そんなことないよ！！」

そんなことあるはずないじゃないか。

「んで、加護の話。簡単に言うと、俺と同じことができるようになる。勿論親父たちからの分は、大分劣化すると思うけどな。それに、こんなことができる」

と言うとヴァンは『コキュートス』を取り出しいつもの様に咥え、と同時に火がついた。

「お前に渡したライターあったろ？多分それと同じくらいの『ゲヘナ』が使えるようになってると思うぜ」

ということだ。

つまり……

「つまり、お揃いだな？マナ」

「っ！ああ！！！！」

ヴァンのたまに見せる見透かしたような言動。

昔は嬉しくも悔しいものだった。

けど、今は途方もなく嬉しい。

カタチじゃない、明確な繋がりが私の中に流れている。
それが堪らなく心を満たす。

冷めていた心がどんどん熱くなっていく。

だから彼に言う言葉は一つしかない。

「愛してるよ。ヴァン」

「俺も愛してるさ、マナ。この世界で一番に」

「む．．．まあ、今はそれで勘弁してあげるよ。時間はあるんだから」

「違いない」

そう。

魔族に時間はない。

いつまでも、果てなくあるのだから。

「ん
ん
ん！」

h?

「あゝ、龍宮？取り込み中すまないが、もういいだろうか？」

せ、刹那あ！！！！？？？？

「いや、これはだな!？」

<sideマナ out>

<side刹那>

いろいろと面白いことになっている龍宮を一通りからかったあと、龍宮の恋人になったというヴァンさんと共に”超包子”に向かった。と言っても五分ほどの距離しかなかったが。

龍宮は、さんざんからかったせいか、いろいろ吹っ切れたようだ。ヴァンさんと腕を組んで歩いている姿を見ても恥じらいというものは見られない。

私もお嬢様とこうして歩けたらどんなにいいか・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ!!!!!!

いかんいかん。

私にはそんな資格などないのだ。
こんな混じり物の私には・・・・

しかし、ヴァンさんは相当できるな。

話し方は粗暴だが、野蛮な感じではない。
見た目は・・・・物凄く気だるそうだが、それはあくまで見た目だけのようだ。

重心のブレがまるでない。

それに加え、龍宮の隣にいる私にもわかる侵食されるかのような空
気。

つまり彼の空間、間合いに入っているのだろうか。

それも幽かに、ほんのわずかにしか感じさせないということは、こ
ちらに敵意がないとみても良いだろうな。

これほどの人物ならば、本来は問いただしているのだが、この方に
限ってそれはないだろう。

そもそも、龍宮には私がお嬢様の護衛だということは話している。

龍宮とは二年間の付き合いだが、仲間の不利になることはしない奴
だ。

そんな龍宮の恋人だというのはならば、問いただすというのはむしろ
失礼というものだ。

それに、だ。

あんなにも楽しそうな龍宮など見たことがない。

そんな中に入るなど野暮というものだろう。

<side刹那 out>

<3side>

その後、“超包子”に着いた面々は（そこにいたクラスメートにい
じられたマナを除いて）“超包子”自慢の中華を堪能した。

ヴァン自身も質問攻めにあいそうであったが、マナ達のクラスメートである四葉五月によって食事に専念できたことを記しておく。

食後、マナと刹那はしばしの間、ヴァンと雑談していた。

内容は主に裏に関するものであったり、ヴァンが今までいった国々の話だったりと尽きることがなかった。

最初は二人に遠慮していた刹那であったが、会話に加わるうちに話に引き込まれていった。

ずっと国内、それも、京都と麻帆良しか知らない刹那にとって、ヴァンの話す海外の話は、非常に興味深いものであったからなのだろう。

しばらくして、寮の門限が迫ると連絡先を交換し、マナ達は帰って行った。

マナ達と別れ、ヴァンは一人夜の麻帆良を歩く。
今日の一日に会ったことを振り返りながら、色々あった一日思い小さく笑う。

「良い月だ」

真意は月と煙だけが知っている。

しかし、歩く彼の顔は穏やかに。

悪魔はそつと橋を架ける（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

今回、前半で原作の大戦における疑問を表しています。

ネコヌマは原作を読んでいて感じたのは、千の人はかなり愉快犯ではないか、ということです。

そもそも、彼の出身は旧世界なのに何故他人の庭とも呼べる場所で好き勝手してるんだろう、と思ったわけです。

そんなことを現地の学者などで研究してない奴がいはいはずない。ということを出してみました。

因みに名前は海外ドラマ星の門よりいただきました。

同じ学者であり、祖国に疑問を抱く、という点で似通っているのはと考えたのが理由です。

中盤以降はマナ編ですね。

ネコヌマの中では、マナは冥琳に近い感じかなーなんて考えながら書いてます。

それ故、廻らないゝの方の如く壊れだす可能性は高いです。

そこら辺はネコヌマの趣味が出ないように注意しなくては！

と一応考えているつもりです。

割と今回までで説明のできていない用語？というか物品が増えてきましたが、もう少し増えてから説明編を入れようかと考えています。なので、詳細はそれまでしばしお待ちください。

では、次回もよろしく願います。

悪魔とエデン（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマでございます。

今回は閑話のような感じですが、
多分。

では、始まります。

悪魔とエデン

地球と言う世界にマナを用いる術が伝わったのは一体いつからなのだろう。

簡単な例と言えば、魔法世界に存在するウェスペルタティア王国から推測することだろう。

ウェスペルタティア王国は魔法世界の始祖の血が流れているとされる者たちが治める国である。

この王国の発生が今より2700年ほど前、と言うことから考えると、それからのだろうか？

いや、事実はそうではない。

マナを用いる術が伝わったのは、今より3000年ほど前。

始まりの場所イスラエル、その王によって偶然呼び出された悪魔によってもたらされた技術。

彼は、その後600年も生きたといわれ、その術を六人の弟子に伝えた。

彼の死後、弟子たちはそれぞれが旅に出た。

一人は永遠を宿し世界を見守るといい、師の存命中にどこかへと消えた。

残りの五人は師の教えを才あるものに伝え、残すべく世界各地へと消えていった。

一人はこの教えを魔に法った力とし、”魔法”と呼んだ。
残りの五人の弟子は、師の教え通り魔を用いる術”魔術”と呼んだ。

五人の弟子は師と同じ年齢まで生き、その間弟子をとり死んでいった。

しかし、もう一人の弟子だけはどこに行ったのか知る者はいなかったという。

ただ、彼が消えた後、世界からほんの少し人と大陸が減った。

そして、ひとつの呪が為された波動を除き……

忘れ去られし記憶を呼び起こせし私は名もなき水晶。

”叡智の伝道者”に使われし、私は水晶。

今はただ主が孫と呼ぶ悪魔の無事を願い過去を謡う。

名もなき水晶の独白

< 3 side >

現在、ここ麻帆良は春休みである。

他都市などにとってはそれが年中行事であるように、ここでも同じく休みであるのだ。

何故二回も言ったか、それはここが学園都市であるという他都市との決定的な違いがあるからだ。

簡単に言うと、平日に出歩く人の数が半端ではないということだ。

ご多分にもれず、ここにもそんな人物が一人。

「この辺りなんだけど・・・」

先日的一件事でドキドキダイナモ（性的でない）がフルチャージになった龍宮マナである。

その様はまさに恋する乙女然としており、それまでの彼女を知る人間からは、他人と間違われるほどに雰囲気を変貌していた。

そのせいもあるのだろう。

周囲の男性陣が彼女に向ける目、それらもまた恋に恋する子羊のそれ（女性を外見で判断してしまう、思春期特有のフィルター）だった。

もともと、彼らも、彼女自身気付いていないことだが、事実彼女はヴァンに再会するまでよりも美しくなっている。

それは、ヴァンの加護を得た際の血液に関係がある。

ヴァンは九柱から加護を得ている。

その中で、最も女性に影響を与える存在・・・夜魔の女王、リリースである。

しかも、そのリリースが最も愛す存在に与えられた加護であるのだから、効果のほどは計り知れない。

だがチャームなど、魅了するようなものはヴァンには付いていない。恋愛にそんなものを使うような存在では、リリスの寵愛など手に出来ないのだから。

ヴァンがリリスから与えられた加護は、「チャームの無効化・夜魔の眷属への絶対的な強制力（害をなすことができない）・ヴァンに加護を与えられた女性の身体的変化」である。

それが今、大いに発揮されているのだ。

とまあ、羊たちの苦悩は放っておくとして、彼女は今ヴァンの店兼住居を探している最中である。

ヴァンと再会してから三日、今日はヴァンの住居のリフォームが終わる日なのだ。

言ってみれば恋人のお宅訪問状態である。

よって、彼女のモチベーションは止まることを知らない。

恋は盲目、走り出したら止まらない、あの方は何も盗んでいきませんでした↓いい奴は大切な〜状態である。

そんな彼女だからこそ、後ろからつけてくる人影に気づかないのだった。

「ここか・・・」

そうこうしているうちにマナがたどり着いたのは一件の建物。つくりはレンガ建てのように見えるが、この麻帆良においてはそう単純ではないだろう。おそらくは、レンガを模した外壁。中に入るには、細工を施された鉄柵の間からのびる直線階段を降りる必要があるようだ。

つまり、店舗部分であると思われる場所は、道からすると地下に当たるわけだ。

ちなみに、階段を降りた場所にはルーフがあり、頭上様子は見えないようになっていいる。

「流石、ヴァン。妙なところで拘るね・・・」

何が流石かは不明だが、言う間にマナは入口へと向かう。

【カランカラ〜ン】

「いらっしゃ・・・マナ、待ってたよ」

「ん？あ、ああ。少し道に迷ってね」

「そか、なら仕方ないな。少しそこら辺にかけといて、ざっと片すからさ」

「・・・ねえ、ヴァン。その喋り方はなんだい？」

「んー？ああ。これ？」

「そう、それだよ」

「なんていや良いのかな・・・リリ姉の教育の成果らしいんだけど、恋人？つーかある一線を超えたら？こうなるらしいよ。そもそも、ここ300年はリリ姉だけだったから俺自身はよくわかんねーんだ

けどねー。親父たちに言わせると、別人らしいけど……そんな変かな？」

[illegible]

「あゝ。だらうねー。リリ姉もそう言ってたし」

ヴァンの口調に刺々しさが消え、戸惑っていたマナだったが、理由を聞くと違う感情が生まれてきた。

「（リリースさん・・・グッジョブ!!!!!!!!!!）これが・・・これが、ツンデレ。これが、ギャップ萌なんだね・・・パル、私にもやっとお前の言うことが理解できたよ・・・これは良いいいいい!!!!!!!!!!!!!!）」

”萌”である。

普段のやる気なしオーラすらも鳴りをひそめ、やんわりと笑顔すら見せるヴァンの姿にマナの萌メーターは振り切りすぎて止まることを知らない。

公道であれば確実に捕まる勢いである。

今現在も捕まっていると言えは捕まっているのだが……

「マ、マナ？鼻血でてるけど……はい、これ……」

「あ、ああ。すまない」

訂正。

先に彼女の体がりミッターをかけたようだ。

差し出されたティッシュで血を拭いたマナは、漸く店内を見回す。

全体を暗い色調で合わせた室内。

全面総フローリングの床。

きれいに磨かれたカウンター。その裏側には調理スペースなどがあり、広く作られている。

カウンター内の壁には数種類のグラスやカップが吊り下げられている。

「ん？ ねえヴァン」

「んーどしたー？」

「（クッ！！首をコテン・・・だど・・・）そのカップはどうしたんだい？ 見たところ少し不揃いに見えるが・・・アウトレットか何かい？」

「ああ！これね。これはさ、麻帆良芸大ってあるでしょ？ その工芸家の生徒に作ってもらったんだよ。流石にグラスは既製品だけだね。せっかく学園都市なんだからこういうのもいいかと思って」

この手法、実は理にかなっている。

商売において開始時、一番気になるのは最初の客と言ってもいい。その為に開店記念！と言うものはあるのだ。

しかし、生徒の作品を使ったということで、高確率に大学関係者が訪れるだろう。

これは、安価に宣伝を行ったようなものである。

また、生徒間の口コミと言うのも案外侮れないものだ。

故に商売は最初が肝心と言われるのだ。

「へえ、そうなのか」

「そーなんですー」

「むう。今の言い方はイラッときたよ？」

「だって片付かないからさー？」

「そ、それもそうだね。じゃあ私も手伝うよ。何をしたらいい？」
「んーそだねー。でも、その前に」

と、ヴァンは入口に、拭いていたマドラーを投げた。

「なあ嬢ちゃんよお・・・パパやママから習わなかったか？盗み聞きするときゃあ、身支度を整えてお祈りも済ませとけてなあ」

「は、はは。拙者仏教徒故、そんなことは習わなかったでござるよ・・・」

「か、楓！！？？」

入口にいたのはマナのクラスメートの忍者だった。

顔の横に刺さったマドラーに盛大に顔をひきつらせて。

「ヴァン！こいつは」

「知り合いなんだってんだろ？わかってる！」

「！！そうか。なら良いんだ」

「良いんでござるか！？」

楓の声と同時に、もう一本マドラーが壁から生える。

止めないあたり、ヴァンとの時間を邪魔されたマナの怒りがあらわれているのだろう。

「嬢ちゃん。選択肢は二つある」

ピッ、と指二本を立てる。

同時に煙草を咥え、一息。

「ふう〜。一つはこの開店準備を手伝う。もう一つは……」

ス、と指を一本おろし、上に向け……

「どっかに逝くか？」

「逝かないでござる！！！」

「じゃあ、床とテーブル拭いとけよ」

どうやら忍者は花畑には行きたくなかったようだ。

見ると、マナと一緒に安堵している様子。

流石に友人の墓参りには行きたくなかったのだろう。

「さて、と。俺も仕事しねえとな」

ヴァンはマナ達を一瞥すると一息つく。

そしてメニューの作成に取り掛かった。

内容は、定番のアメリカンなどから始まりラテ、カフェオレなどの良く聞くものに、サブとして何を足すかを客側で選べるようになっている。

いうなれば喫茶店のメニューの省略のようなものだ。

後は適当にデザート類と軽食を。

勿論カレーとナポリタンを入れることも忘れない。

喫茶用のメニュー作成が終わると、次は夜の部の作成に入った。
夜の部はpm8…00〜am2…00まで営業のバーもどきだ。

ヴァンはそもそもシェイカーなど使えない、故にそれ以外が主流になる。

また、さほどカクテルに詳しくない、ということもあつてのもどきなのだ。

どちらかと言うと居酒屋の方がじっくりくるのかもしれない。

こちらはざっくりと種類のみを書いていく。

「ヴァン殿、掃除終了でござる」

「こっちも終了だよ」

「そうか。こっちも終わるところだ」

気がつけば昼から始めた作業は、終わる今は空も赤るみ始めていた。

「そう言えば、ヴァン殿。店の名前は何なのでござるか？」

「そうだね。まだ聞いていなかったよ」

「名前か、実はピッタリのを考えてある」

ヴァンは、思わせぶりに間をおく。

「店の名は”エデン”だ」

「そ、それはまた・・・」

「エデンでござるか。どこかで聞いたことのあるような名前でござるな」

ヴァンから出た名前に、ヴァンの正体を知るマナは悪い冗談だと顔を引き攣らせ、楓は聞き覚えのある名詞に首を傾げた。

「はるか昔、最初の人間が暮らしていた場所。簡単にいやあ、もう帰ることのできないどこか、そんな感じに考えときな」

「らしいよ？楓」

「むむむ。何やら違うような気がするでござるが・・・」

「仏教徒にゃ関係ねえ話だ。何より説明すんのがだりい」

「それが本音でござるか・・・まあ、いいでござる。それよりも、今日のところはそろそろ失礼させてもらおうかと」

「そうだね。私も今日は、実家のほうに顔を出さなきゃいけないし途中まで付き合うよ」

ヴァンの適当な発言に返答しながら、帰り支度を始めるふたり。マナの方は名残惜しそうだが。

「じゃあ、また来るよヴァン」

「ニンニン。今度来るときはお客でござるな。楽しみにしているでござるよ」

「ああ。オープンは今後日だ。そんなときゃ客として扱ってやるよ」

「それと、マナ」

「ん？なんだ・・・ん・・・む」

「・・・気をつけて帰りなよ？」

「・・・・・・うん」

ヴァンがマナにキスをした。

この時、楓は某『JⅡPⅡP』の気持ちがよくわかったと言う。

魔法とか、超スピードじゃあなかったのは確かだろう。

もっとも、マナに気をつけてと言うヴァンの顔を眼を見開いて脳内に保存したのは内緒だが。

その時のマナの表情もレアではあったが、楓にとってはカキワリの如く不要なものであったという。

マナ達が帰った店内で、ヴァンは煙に塗れていた。

日増しに増える『コキュートス』の量。
熱を増していく軀。

そもそもが人間の身で『ゲヘナ』を飼い慣らすことなど不可能なのだ。

マナのそれは、オリジナルからすれば下の下の下。
ただ、罪と念を焼く、と言う概念だけが宿ったもの。

ヴァンのオリジナルは条件さえそろえば、この世全てを焼き尽くすような代物だ。

このままいけば燃え尽きるだろうこの軀。

一度元の身体に戻って調整を施す必要を感じているヴァンであった。

「エデンか・・・中々おもしろえと思うんだがな。追放された人間たちが悪魔によって舞い戻る。くく、喜劇だな」

悪魔の眩きは煙に消える。
なんにせよ、彼の麻帆良での生活はここで始まる。

悪魔とエデン（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマです。

今回は主人公に設定が追加されましたね。
こいつはツンデレでございます。
普段の口調がきついのに、二人だけになるとヤンワリ目。
どうしてこうなった……

因みに、楓のことは解りません。
ヒロイン候補ではなかった……

さて、次回ですが吸血鬼編になります。
エヴァさんとのように絡むか決めていませんが、ヴァンがエヴァ
さんにデレることはない!!!!!!
と言っておきます。

うちの主人公はフラグメイカーではないので。

それよりも、廻らゝよりもこっちのが書きやすいのは何故だ……

では、次回もよろしく願います。

悪魔と桜と散歩（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマでございます。

今回より吸血鬼編突入です。

なんだかやつとネギまっぽくなるんでしょうか・・・

では、始まります。

悪魔と桜と散歩

今日、出奔していた青山家の長男が帰ってきた。

対外的には武者修行と言うことになっているが、事實は婚姻から逃げたのだ。

それが帰ってきたということは、決心がついたということなのだろう。

何はともあれ神鳴流宗家の嫡男の帰還は喜ばしいことであった。

さらに、近衛家との婚姻もまとまったというのだから、協会全体が沸いたのは当然のことだろう。

しかし、彼の話を聞いているうちに、どうもまずいことになってきた。

彼によると、出奔以来魔法世界で戦争に参加していたのだと言う。人に仇成す魔を狩る神鳴流剣士が、である。

やはり青山の血筋か。

我々の気持ちは同じだった。

我が協会内に措いて秘さねばならぬ事がある。

それは、青山家が性格破綻者の家系であるということだ。

かの家は通常の生活を送ることに關しては、何ら問題のない品行方正な家系である。

しかし、退魔師の一族としては致命的な問題のある家系なのである。それは、彼らの性質にある。

己が為に剣をふるい、人斬りを厭わない。

彼らは自分のためにしか剣を振るうことができないのだ。何をなすにしても、核にあるのは己。

通常の剣士であつたのなら、この在り方も認められたのかもしれない。

しかし、京を守護する者であるはずの神鳴流剣士にはあつてはならないことである。

神鳴流剣士において最大の禁忌は守護目的以外の人斬りである。神鳴流は魔を断つ流派。人々を魔から守る盾であり打ち払う矛なのだ。

そんな存在が人を斬る、己の満足のために。それは許されざることではないだろうか。

その禁忌を青山家は簡単に犯す。

現に、帰ってきた詠春は夥しい死臭を纏っている。

これは百かそこらではきかない数を斬つたのであろう。

彼の姉妹にしても問題行動は後を絶たない。

普段が真面目な家系だけに、一部の高弟を除き彼らの実態、問題は伏せている。

しかし、鍛錬の場で彼の姉妹が再起不能にした門下生は数知れない。訓練、と言う一線を踏み越えてしまうからだ。

それでなくとも限界に近いラインの稽古を行う神鳴流において、その一線以降は殺し合いになる。

それにより、本来であれば師範代級に育つ若者が何人つぶされたか。さらに、これはあまり知られていないが彼女たちは逆上し、一般人に斬りかった前例がある。

何より性質の悪いことに、青山家は人のために剣を振るっているつもりでいるのだ。

事実、かの家に助けられたものも多く、慕う人間も多い。

しかし、我ら古年寄りには彼らが危険に映って仕方ないのだ。いつか彼らのために裏を知らぬ人々が危険にさらされるのではないか。

私は、彼が結婚することによって、その性質が少しでも変わること

願わくば、彼の子に彼の性質が受け継がれることのないよう。

[illegible]

>3 side<

【カランカラーン】

「いらっしゃいませ」

ここは、喫茶『エデン』。

現在は、零時をまわったところだ。

深夜営業と言うことは、バーの時間である。

今日も開店時からの常連客が来たようだ。

「……今日は空いてるな」

「いえ、満席になるなんて縁のない店ですから。大体五人くらいいればおんの字ですよ。それに今日は平日ですからね。神多羅木さんは平日にいらっしゃることは少ないですからそう感じるんでしょう」

店内に入ってきたのは黒いスーツに鬚、サングラスと言うハードボイルドの手本のような男、麻帆良学園教師『神多羅木』である。

彼は店内に入ると定位置としているカウンターへと座った。

ヴァンの言うとおりで店内には4・5人の客がいるばかりである。

それも今まさに帰らんとしているようだ。

「少し待っていてください。あちらのお会計をさせていただきますので」

「ああ。気にしないから」

と言うとヴァンは会計を済ませた客を送り出しに行った。

「またいらしてくださいね」

【カランカラーン】

「お待たせしました。今日はいかがしますか？」

「いつもので頼むよ」

「畏まりました」

【トントンッ】

彼がいつも頼むものはバーボンである。

エデンでは時々銘柄が変わるものの、たいていの場合は『メイカーズマーク』をだしている。

これは、アメリカの職人芸と言っても良い様な酒だ。

スモーキーな香りと、焼け付くような辛さが人を虜にする。根強いファンの多い逸品である。

彼もその例にもれず、というわけだ。

「相変わらず不思議な仕組みだな・・・」

「まあ、一応バーですからね。秘密は聞かれないようにとの配慮ですよ。じゃないと安心して胸のつかえも取れないでしょう？どうぞ」

「確かにな。魔法関係者だからこそそのサービスだな」

先ほどの音は客席ごとに簡易認識障害をもたらすものである。

これにより店内での会話は違う客にはたわいない会話に聞こえるという代物だ。

ヴァン自身、魔法関係者として学園内には知られているので、仕事帰りの魔法先生達が心おきなく会話できるようにとの配慮である。

そのせいもあってか、夜間の警備明けや週末には魔法先生の予約が多い。

複数人で来ることもあれば、神多羅木の様に、こうして一人で来る者もいる。

「ふふ。しかし、君のその口調にはいつまでたっても慣れんな」

「ははは・・・仕事中はどうしても、こうするのが癖みたいなもの
でして。どうぞ」

「そういうものか・・・ん？新作か？」

「ええ。自家製ジャークーですよ。バーボンには大和煮なんかも意
外に合うんですけど、本日はこちらをどうぞ」

「ふむ、やはり洋酒には肉類が合うな」

「そうですね・・・個人的にはピクルスなんかもおすすめですね。
今度お出ししましょう」

ヴァンは仕事中はいつもの口調で話すことはない。

これは契約と同じようなものだと言っているためだ。

「そういえば・・・マスターは、最近桜通りで騒がれている吸血
鬼騒ぎを知っているか？」

「まあ、噂程度にですが存じております。その件で、生徒さん達が
騒いでいるのを何度か。通り魔か何かでしょうか？」

「いや、おそらく魔法関係者だろうな。私自身確認したわけではな
いが、この学園には真祖の吸血鬼がいる。エヴァンジェリンⅡAⅡ
KⅡマグダウェルと言うんだが、聞いたことはないか？」

「闇の福音ですか・・・それはまた。死亡説は信じていませんで
したが、こんなところにいるとは」

「もっとも、学園結界とサウザンドマスターの呪いとやらでかなり
弱体化されているようだな」

「そうなんですか。でも、ガンドルフィーにさん辺りはうるさそう
な話ですね」

「実際その通りだ。あいつは真面目過ぎて困る」

「ははは。まあ、彼は所帯持ちですからね。その辺りもあって過敏
になってるんでしょう」

「おそらくその通りだろうな。それに、この件に関しては学園長から不干涉を言い渡されているのも気に食わないのだろう」

「こんな事件なのに、ですか。それはまた・・・」

そう言うのと、神多羅木の顔が少し険しいものになる。

カロンとグラスの氷が滑る音が店内に響いた。

「言いたいことは分かる。確かに不可解だ。おそらく、今回も子供先生がらみのことなんだろうさ」

「ああ。噂の子供先生ですか。高畑さんなんてあからさまですからね」

「まったくだ。学園内にも高畑君と同じ様に考えている人間が多い。ただの9歳児に何を求めているのやら・・・」

「ただの9歳らしいですよねえ。頭の中身はともかくとして、見た目は。私にはわかりませんよ」

「本人にその気が全くないのなら、周りもどうにかするのだろうが、本人もただの9才児として見られることを望んでいないようだ」

そう言ってグラスの中身をあおる。

「そんな話をしたということは、私も不干涉でいろ、と言うことでしょうか？」

「さて、私は職場の愚痴を言ったただけだが」

「そうですか。では、たまにその辺を散歩してみます。真祖というのも興味がありますし、何より店にお客様が来なくなっても困りますからね」

「そうか。あまりお勧めは出来ませんが、運動不足もいかなだろうかな」

「はは。仰る通り」

二人の笑い声とともに夜は更けていく。

< 3 s i d e o u t >

「ガウ」

「ワウ」

ん？

顔つめてえ……………

「ガウガウ」

この感じは……………

「ワウワウワウ」

ソドム達か。

「どーしたよ」

ん???

服引っ張ってやがる。

つーことはあれか。

「散歩かあ？」

時間は……………と。

七時か。今日が定休日によかったぜ……………普段だったら寝坊だ

からなあ。

「ちよーっと待ってよ。店掃除してから連れてってやつから」

「「ガウ（ワウ）」」

にしても、いつからこんなに散歩好きになったんだ？

まあいいか、掃除掃除っと。

「とりあえずこれ食べて待ってろ」

うし、昨日の残り処分完了。

こいつらが雑食でよかったぜ。

窓拭いて、テーブル拭いて、床拭いて、と。

よし。こんなとこだな。

「散歩行くぞー」

「「ガウ（ワウ）」！！！！」」

折角だし、桜通りつてのを見とくか……

それにしても、どう見てもヨーロッパの街並みだな。

こんなあからさまに、国に喧嘩売らなくてもいいのによお。
西洋魔法使いってのは馬鹿なんだろうなあ。

「桜がいい感じに咲いてんなあ。そう思うだろ？」
「ガウ」

ん？

ソドムはどうした？

「ワフツ」

「ん？そっちになんかあんのか」

あー。なんかいんな。

面倒臭え。

「『グラトニー』」

これで周囲のマナを吸収。

人間に限らず、生物ってのは無意識にマナの少ない場所を避ける性質があつから、これで人払いっと。

さあゝて、どんな野郎がいんだ？

？女だったか？まあいいか。

殺さねえ程度に遊べるといいなア。

「おい嬢ちゃん。学校はどうしたあ？ガキは学校の時間だろうが？」

「この居心地の悪い空気は貴様の仕業か？」

「ああ？寝言は授業中にでも言ってる」

「貴様・・・私が誰か分かって言っているのか？」

「学校さぼってるガキだろ」

こー、誰かに似てる感じがするんだが・・・

「貴様！！！！私が『真祖の吸血鬼』エヴァンジェリンⅡAⅡKⅡマ
グダウエルだと知ってのことだろうな！！！！！！！！！！」

「じゃあ、俺はヴァン様だな」

吸血鬼。ああ。夜魔の眷属のさらに眷属ね。
通りで、薄っぺらい感じがするわけだ。
しかも、こいつ妙な感じになってんな。

「チッ（なんだ？この男の威圧感は！！それに、魔法薬が無い今の手しかない）！！おい！貴様！！私の目を見ろ！！！！！！！！」
「あ！？（幻想世界かなんだなあ）」

やっぱか。

芸のねえ・・・600年に生きてこの程度かよ。
つーかどこだよここ。

「クックック、ハーツハツハハハハハ！！！！！！！！これならば貴様の妙な力も通用すまい！！！！！！？？さあ、話してもらおうか！！！！貴様は何者かをなーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「くくくっ」

「何がおかしい！！！！！！！！！！」

そりゃ当然だろ。

たかが眷属の眷属風情がどれだけ高圧的に見せようとしても眷属の威圧にすら届いてねえ。

それどころか、生まれたての魔族の半分にも見たねえんだよ。

ガキが。

「いやいや、では改めて名乗ろう。俺はヴァン。ヴァンⅡVⅡベール」

まあ、折角だしな。

精々俺のストレス解消に役立ってくれや。

「地獄の管理人だ」

燃え狂うまでなあ。

悪魔と桜と散歩（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

今回の序盤は帰ってきた詠春と神鳴流です。

原作において、月詠が破門されてましたよね。そこからアイデアを戴いたものです。

詭弁ですが、守るため以外はダメ人殺し。と言う感じがあるのではないかと。勿論依頼も、守るためという前提があつての殺しです。

神多羅木さんは常連さんです。

本文内からも分かるかと思いますが、彼は野菜少年のことを年齢通りの少年としてみています。

ですが、何かしてあげようとは思っていません。

彼は職業が魔法先生であつて、生徒ではない者にそこまで肩入れはしない、というスタンスです。同僚としての手伝いはするかもしれませんが。

因みに、ガンドルさんですが、本作に措いては『悪の魔法使い』としてエヴァを嫌っていません。『賞金首になるくらい大量の恨みがかっている』ということで、家族や麻帆良に住む人々に火の粉が飛ぶのではないかと危惧しているので警戒している感じです。

次回エヴァさんとバトルです。

初戦闘描写。まずいですね。

呪文とかどうしょ・・・しっかりメモらないと。

今回はエヴァファンの方は見ない方がいいかと思います。

ストーリーの構成段階で浮かんだことを書いていくと、彼女の築い

てきたものがある意味壊れる事態が発生します。
これは、後の野菜少年にも関わってくることです。

長くなりましたが、次回もよろしく願います。

悪魔と真祖と嘆き（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマでございます。

今回が、ネコヌマ初の戦闘シーン・・・と思ったのですがそうなりませんでした。

というか、野菜君一回も出てない・・・

は、始まります。

悪魔と真祖と嘆き

吸血鬼には二種類いる。

それは、初めから吸血鬼だったものと、後天的に吸血鬼になったものだ。

初めからそうだったものを『真祖』といい。
後天的になったものを使徒と呼ぶ。

何故、この様な区切りが判明しているのか、それはかつて存在した『真祖』の吸血鬼が残した手記に記されていたためである。

その吸血鬼はすべてが謎に包まれているが、そのものの手記によると紀元前には数十の吸血鬼の『真祖』が存在していたのだと言う。

そもそも、何故吸血鬼が恐れられるのかと言う理由は、彼らの魔力の高さによるところが大きいだろう。

彼らは、通常の魔法使い五十人分の魔力を持つと言うのだから驚きである。もっとも、『真祖』に至っては二百人分とも五百人分とも言われているが。確認のすべはない。

彼らの特徴として、二つのことがあげられる。

一つは吸血、もう一つは不老不死である。

一般的に吸血行為をするものを吸血鬼と呼んでいるのだが、彼らが何故血を吸うのか知っているものは少ない。これも、かの『真祖』が明らかにしてくれた。

なんでも、『真祖』は別として、使徒は自分でオドを作り出す能力が低いのだと言う。その為、吸血によってオドを補給するのである。不老不死については詳しくわかっていないが、一部の学者は何らか

の固定化のようなものが働いているのではないかとみている。つまり、現状を固定することによって不老にし、欠損しても固定された状態まで復元される、その結果が不死なのではという仮説である。しかし、この仮説では知識が増えることもなくなってしまうので、今のところは不明と言うのが現実だ。

さて、エヴァンジェリンⅡAⅡKⅡマグダウエルと言う吸血鬼がいる。賞金600万\$の近代までで最も有名な吸血鬼である。

彼女は『真祖』だと言うのが通説であるが、近年使徒ではないかという学説が出ている。

それらによると、彼女は術式によって吸血鬼化した人間であり、『真祖に近い使徒』ではないかと言うのだ。

確かに、記録によると中世には大量の吸血鬼が確認されており、これらの生き残りがエヴァンジェリンであるという考えは正しいように思える。

しかし確証がない以上、不用意に結論を急ぐ真似は避けた方が賢明である。

— — — — —
— — — — —
— — — — — 民明書房『素晴らしき魔法生物?』より — — — — —
— — — — —

ヴァンと対峙したエヴァンジェリンは幻想空間を使った。それは、学園結界で弱体化した彼女の力では十全に戦うことが不可能と判断したためである。

そもそも彼女が吸血行動をとっている理由が、弱体化した魔力を補給するためなのだから万全の状態とは言えないのである。

よって、自分の理想的な空間を精神世界に構築する術である幻想空間を使った、と言うわけだ。

構築された空間は、水に囲まれた浮島。

おそらく彼女が用いる属性が有利になる空間なのだろう。

その空間で、ヴァンは現状を把握することに努めていた。

「『スロース』」

対峙する相手がいくら夜魔の眷属、それも眷属の眷属と言えるほどに夜魔の気配が薄れ、下っ端魔族以下の力しか感じないような相手であったとしても油断などあってはならないのだから。

ヴァンはまず『スロース』で幻想空間の性質を把握した。

それは、この空間がどのように自分に干渉し、自分の加護がどの程度発揮されているかの確認であった。

結果、”本来”この空間は術者の絶対空間であることがわかった。と言っても、なにもこの空間では術者に絶対勝てないということではなく、精神力次第では勝つ可能性はある。

では今回はどうか、ヴァンには加護によって夜魔の力は無効化される。

幻想空間とは簡単に言ってしまうえば『魅了の魔眼』の上位種のようなものだ。

原理としては自分の創り出した精神世界に”惹きずり込む”のだから、当然無力化対象になる。

しかし、ヴァン自身がストレス解消の為、この空間に入することを許容した為、ヴァンに対する影響力のいが無力化された形になった。つまり、エヴァンジェリンが全力を出すことに支障はないのである。

もったも、それが彼女にとっての救いかはわからないが……………

「ククク・・・ハーツハハハハハッ!!!!!!!!!!!!!! 地獄の管理人だ？ そんな大層な二つ名を騙ったところで貴様と私の差は歴然ではないか!!!!!!!!!! なんだその一般人に毛が生えたような魔力量は!!!!!!!!!!? ? ? ? それで地獄の管理人？ 片腹痛いわ!!!!!!!!!!」

今のエヴァンジェリンは、正真正銘全力全開、そんな彼女にとって99%人間部分を増やしているヴァンはあまりに脆弱に映った。

要するに、月に吠えるのは自由だが、その月が落ちてきたらお前は受け止めることができるのか、と。

告げた彼女の表情は多分に嘲笑を含んだものであった。

「吠えたな、吸血鬼風情が…………『グリード』」

そんな状況でヴァンがする行動は、全力でたたきつぶす、と言うことに尽きる。

その為には『グリード』で増やしていた”人間の要素”、その割合を変化させることであつた。

”増やす”と言つても全体量が増えるわけではない。

ヴァンの『グリード』は全体の割合を変える能力だ。100%の内の何%を変化させるか、と言うことである。

今回増やしたのは言うまでもなく”魔族の要素”。

彼本来の姿になるのである。

「なっ！！！！なんだ貴様その力はっ！！！！それに貴様・・・悪魔か！！？？しかもこの魔力は・・・」

「テメエの想像通り、この身は悪魔。さあ、どうするよ？吸血鬼い」

「だがっ！！それがどうした！！！！リク・ラク・ラ・ラック――

――」

エヴァンジェリンは恐怖していた。

目の前の相手は確かに強いのだろう。

爵位級でも上級の実力者であることも、対峙してみte感じる事ができた。

しかし、それでも体を感じる違和感が理解できない。

男が何か言ったと思うと膨れ上がった魔の気配。同時に感じた絶望感。

眼前の男には逆らつてはいけなと体中が叫んでいた。

そして感じたのだ。この男に従えたら、と。

何か命じられれば無条件で従つてしまふようになる感覚を。

従うわけにはいかなかった。

彼女が生きてきた600年という歳月は、彼女を強く、強かに変えていた。

その歳月がつくりあげた『誇り高き悪』と言う矜持の為にも。

そして彼女の魔法が詠唱を終え、形を――――

「闇の吹――――っっ!??」

成すことができなかった。

否、魔法を終えることを体が拒否したのだ。

初めに肺が空気を吐き出すことをやめ、次に咽喉が音を成すことを拒否し、顎が職務を放棄し、唇は互いの別れを拒んだ。

「（なんだ!? 奴が何かしたと言うのか!?!?!?）」

「あゝ。俺が何かしたと思ってんだろ? 残念だが半分正解だ。残念賞だなあゝ嬢ちゃん」

「つく（動くようになった?）!?!?!?!? 半分正解とはどういうことだ!?!? 一体何をした!?! 爵位級であろうと、この私相手にこんなことが簡単に出来る筈がない!?!?!」

事実、エヴァンジェリンはこれまでの生涯で幾度か爵位級の悪魔と戦ったことがあった。

そのいずれの悪魔も手ごわいと感じることはあったが、彼女が戦う手段を取ることでさえできないことなどなかった。

戦い、蹴散らし、勝ち残ってこれたからこそ現在に至るのだから。

そんな彼女が今何をしている？

突然現れた東洋風の男に、一切の攻撃を行うことすらできていない。攻撃しようとするたびに、体がそれを邪魔する。

いや、体よりも自身の存在自体が攻撃することを拒んでいるかのようだ。

魔法が使用された痕跡などない。

物理的に拘束されてもいない。

では、いったいなんだと言うのだろうか。

全ての答えは目の前にいる、いけすかない悪魔が知っている。

それすら、彼女には屈辱であつた。

「嬢ちゃんさあ、吸血鬼なんだろう？」

「それがなんだと言うんだ！！！！」

彼女にとっては当然のことを尋ねるヴァン。

その顔は出来の悪い生徒をからかうそれだった。

「じゃあよお、吸血鬼ってのはどうやってなるんだ？」

「そんなもの、吸血鬼に噛まれればなるに決まっているだろう！！！！」

フンツ、とでも言いだしそうに吐き捨てるエヴァンジェリン。
それを見たヴァンはさらに問いかける。

―――入り口が開いていく。

「ほう。そりゃあ、使徒って呼ばれてる奴らのなり方だな。じゃあ真祖は？噛まれた奴らは真祖じゃねえだろ？」

「クッ！！術式に、よってだ・・・さっきから何が言いたい！！！！！！？？？？」

口は、あいた。

「これまた、残念。真祖には”成れない”が正解だ」
「っな？」

「真祖ってのは、生まれたその時から真祖なんだよ。因みに、真祖は人間の陰気の塊、つまりは精霊みてえなもんだ。術式なんかでなれるもんじゃねえ。あれは生じるもんだからなあ」

<sideエヴァンジェリン>

こいつはさっきから何を言っている・・・

真祖には成れないだと？

では、私の存在は何だと言うんだ？

―――聞いているいけない

「詰まる所、嬢ちゃんはハーフヴァンパイアみたいなもんだったわけだ。もっとも、吸血鬼の因子が強かったみてえで不死性はあったようだがな。まあ、俺が見たところじゃ、そのままで300年も経てば吸血鬼の因子にも限界が来て、人間として死ねたろうなあ」

・・・・・・・・こいつは何と言った？
人間として死ねた？

「存在が内包する全体数ってのはそれぞれ決まっている。あの術式の場合は、その内五割を吸血鬼に変える。しかし、人間に限らず生物は成長するわけだ。それによって存在は大きくなる。だが、吸血鬼の割合は変わらない。これは、術式の限界で吸血鬼因子を増減させることができないからだ。じゃあどうするか・・・簡単だ。増やせも減らせもしねえんなら、固定しちまえばいい。その存在をその時のままに・・・それが不死性の原因ってわけだ」

それがなんだと言うんだ。

先ほどの理由には足りない。

私が死ねた理由が足りない。

生きている理由が足りない・・・

「この術式の最大のポイントは”固定化”にある。だが、それこそがこの術式で一番力がかかる部分でもあるわけだ。どんな術式であろうと、調整もなしに長い時を経ることはできない。この術式の限界がおよそ300年——」

では、何故私は死なない。

何故、その倍以上生きている私は・・・・・・・・

そして、何故貴様はそんな顔で私を・・・・囓う。

「————しかし例外が生まれた。それが”闇の魔法”と呼ばれる禁呪。確か、その魔法は放出される大量のmanaを自分の霊体にまで融合させることによって莫大な力を得る、つつーもんだったったな？」

・・・その通りだ。

闇の魔法は放出されるはずの魔力を霊体に喰わせて、それと同じ効果を発揮させると言うモノ。

まだ力の弱かった私が編み出した切り札。

しかし、それがなんだと言うんだ・・・

「つまりだ。伝言ゲームみてえなもんだ。もっと詳しくわかりやすく言やあ、データの転送が一番よく似てる。次へ次へ伝えていくうちに本質はどんどん簡単になってく。嬢ちゃんの場合、闇の魔法を使うたびに、魔法を解いた状態に戻るたび人間の部分が犠牲になってったんだろうよ」

それが正しければ、二つの性質をもっていた私は。

わた、しは

「わかるか？嬢ちゃんは吸血鬼として生きるために人間を捨てたんだよ」

・・・

「わからなかったか？闇の魔法を使い始めてから体の不具合が消えなかったか？なによりも・・・殺人に対する忌避感が消えただろ

「？」

そ．．．んな。
嘘だ．．．

しかし、奴の言うことも理解できる。
いや、理解できてしまう。

しかし、それは．．．つまり．．

「つくづく。600年の孤独。その原因は自分自身ってわけだ！？
つくづくイカレタ嬢ちゃんだなあ？」

わ．．たしが？

原因？

死にたくなって殺して。

殺しに来るやつらと一緒にだと思いたくなくて、女子供は殺さない、
って言うって。

なんでこんな体なんだろう、って．．

あ、れ？

何でなんでなんで——

「．．．．．あああああああああああああ
あ！．．．．．」

<sideエヴァンジェリンout>

あーあーあーあ。

壊れちまいそうだな。

俺に攻撃できない理由、まだ教えてねえのによおー。
はあー。

まあ、暇つぶしにはなつたけどよお。

流石に本来の『スロース』で理解させながらの暴露はしんどかったのか。

あ！

ついでにもうちヨイ壊しとくか。

幸い、幻想空間はまだ消えてねえしな。
っし！

「『ゲヘナ、この者の名、命の書に在らず』」

「あ、あああああああああああああああ！……！！！！！！！！」

おー。燃えてんな。

こいつは精神だろうと焼き尽くすからな。

お、再生してんな。

末端からか
・
・
・
・

あーあ。再生するたび崩れてるわ。

良かったなあ嬢ちゃん。

これが外だったらもつとえぐいの見れたんだが。

ま、簡単などこでやめとくか。

完璧に壊すと面倒だな。

どっちみち、当分は静かになっていいだろ。

さって、散歩の続きにすつか。

【パチンッ】

お、戻ったな。

ソドム達はーっと。

「ちょっと良いかい？」

悪魔と真祖と嘆き（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回はちょっと伏線です。が、置いておきます。

えー、エヴァさんがあんなにあっさり壊れたのにも理由があります。一つは、眷属であったこと。

もう一つは、広域にスロースで理解空間が広がっていたからです。

つまり、二重の強制力でわけがわからなくなった、と言う感じです。

今回は、ヴァンとエヴァさんは相性最悪なのでこの様な形になりましたが、加護なしでやれば彼女の勝ちです。

いろいろと減少されて存在しているので、現界している限りはこのままです。

今回遅くなってしまいましたが、次回はもう少し早くなるかと

では、次回もよろしく願います。

悪魔と後始末（前書き）

お久しぶりでございます。

ネコヌマです。

更新しますと言い続け、漸くの更新となります。

お待たせして申し訳ありませんでした。

では、どうぞ。

悪魔と後始末

“悪魔は存在するか？”

その問いに、かの世界の裏に関係する者は『YES』と答えるであろう。

彼らは何度もその存在と戦い、利用した歴史があるのだから答えは簡単に導き出されるだろう。

しかし、“悪魔はどこに存在するのか？”

と問われると確証をもち『YES』と答えることはできない。そう問われた場合、彼らに出来るのは自分たちの私見まみれに『魔界』と答えることだけだろう。

『悪魔の存在が許されるのは魔界』

彼らはここ2000年ほどの間そう主張してきた。

曰く、悪魔たちは人間の穢れの集まりである。

曰く、悪魔は人間を唆し墮落させようとする。

そう叫ぶ者たちは皆、魔法と言う技術を持って対抗するようになった。

つまり、悪魔と言う『絶対悪』を作り上げることによってそれに対抗する自分たちは真逆、かの存在を打ち滅ぼす『正義』だと言うのである。

彼らにどのような変化がありその考えに至ったのか私にはわからない。

だが、少なからず理解できることはある。

それは、彼らが力を手に入れ、それに溺れ始めているということだ。

ヒトは自分たちを守護する存在を信頼する。

害を為すものが自分たちにとって強大であればある程に、だ。

その感情はほどなくして信仰に変わるだろう。

しかし、そうそう何度も悪魔や、異形などに襲われているものではない。

だいいち、それら異形などよりももっと強い存在が身近にいるのだ。魔法と言う術を持たない者にとって、魔法使いは新たな恐怖の対象へと早変わりすることは目に見えている。

では、彼らはどうしたのか。

ここで先ほどの悪魔の話が生きてくる。つまり、悪魔を倒していた彼らは自分たちをその真逆、神に仕えるものであるとしたのだ。

その影響が、魔女狩りに代表される異端審問であり、マギステルマギの出現である。

“マギステルマギ”

魔法使い側の正義の象徴であり、広告塔。

その影響力の高さ故にいろいろとその存在がうわさされるが、実際の役割を知る者は少ない。それは彼らマギステルマギの真の役割は反勢力への抑止力であるからだ。

彼らは個人で強大な戦力である。魔法使いたちの正義に反すると言うことは彼らを敵に回すことに等しいのだから、次第に正義の魔法使いに反抗すると言う考え自体が生まれなくなる。

四隅を本棚に囲まれた部屋の中で、明々とした文字らしきものが本の中に吸い込まれていく。仕業の主は40代ほどであろう金髪の男性、肩辺りで切り揃えられた髪、糸目。

彼が手を振るたび、宙に文字が現れ、そして本の中へと消えていく。何度かそれを繰り返しただろうか、彼は何か思案すると手のひらを合わせ、本を閉じた。

「ふう、こんなところですかねえ」

「ひと段落つきましたかな？」

部屋の中にはいつの間にやら彼以外の男性が一人増えていた。

「ええ。少し昔が懐かしくなってしまったもので、少しまとめておこうかと思ったのですが。少々とりとめのないものになってしまっています」

「それでどうでしたかな？ 昔を振り返ってみた心境と言うものは」

金髪の男性はその問いに少し顔を強張らせ、自分の思いを口にする。

「やはり・・・私は後悔しているのかもしれませんが。決して彼らに我々の知識を与えてしまったことを後悔しているつもりはありません。ですが、その皺寄せがすべて息子にいつてしまうのかと思うと・・・ヴァンに申し訳ない気持ちになります」

「なるほど・・・確かにそれは一理ありますな。それでなくとも今回の若の現界に際しては十二会から依頼があったりと不自由な思い

をされていることでしよう。旦那さまの仰ることを抜きにしたところで若にとっては『面倒』でしょうなあ。ですが、若も伊達や酔狂で地獄の管理人を名乗ってなどおりません。それだけの力があると周りにも認められたからこそその地獄の管理人なのですから。違いますかな？」

苦笑するかのように、もう一人の男性――白髪交じりの黒髪を後ろになでつけた執事然とした――が答える。さも当然であるかのよう

に。

金髪の男性はほんの少し目を開き、ただ一言肯定を示した。

3 side

ヴァンが目の前にいる対人恐怖症吸血鬼の処遇を考えていると、後方から声がかけられた。

待ってくれないか、と。

「ああ。高畑サンじゃねーか・・・どうしたあ？そんな真剣な面しやがってよ？」

現れたのは学園都市NO.2の実力者、高畑ⅡTⅡタカミチ。

何故か彼はインポケットしており、その体からはうちに収まりきらない気が立ち上っている。

つまりは臨戦態勢なのである。

「ここで何があったかは聞かないでおくよ。そのかわり、彼女をこちらに渡してもらおうか？」

そんな彼の口から出たのは質問と言う名の強制。

言外に自分に従え、と言う我儘極まりないものだった。

「おやおやおやおや。そいつはまた、おかしなことを言うじゃねーか」

対するヴァンはおかしなことで返す。

何があったか聞かない、しかし渡せと言うのだ。

これは一見穏便な言葉に聞こえるかもしれないが、事実は自分が決める、と言っていることと同じである。

それにヴァン自身、これからエヴァンジェリンを如何こうしよう、などといったことは考えてなどいないのだから、余計に滑稽な問答に思えてしまうのであった。

故にヴァンにはおかしい。

高畑は焦っていた。

学園内で結界らしきものが展開されているとの知らせを受け、急ぎ現場に駆けつけてみればこの状況。

麻帆良に来てからの短くはない付き合いであるエヴァンジェリンが地に伏し、死人もかくや、と言った肌色。

相対するは先日より学園に住み着いた要注意人物。
その人物が友人と言ってもおかしくない吸血鬼を見下ろして何か喋っている。

こんな状況でどうして穏便な対応ができようか。

彼の頭の中にはヴァンがエヴァンジェリンに対して攻撃を与えたであらうことが決定事項になっていた。

それゆえの強気、強引。

「おかしい、とはどういうことだい？ 僕には君が彼女に何かしたようにしか見えないんだが」

「いや。確かに俺がこの餓鬼が倒れてる原因で間違いねーよ。「ならっ！！」だがな、先に仕掛けてきたのはこの餓鬼だぜ？ 俺は話しかけたただけだったのによ」

それに、とヴァンは続ける。

”それにこいつが桜通りの吸血鬼らしいぜ？”

とエヴァンジェリンから得た情報をもとにした推測を伝える。

「それは・・・何かの間違いだ」

それは高畑にとって”そうであるべき”いや、”そうであって欲しい”こと。

——例え封印”されて”いたのだとしてもエヴァンジェリンは学園

内で一切の悪事を働いていない――

その前提があったからこそ、これまで学園の魔法使いは彼女に手を出さなかったのだし、これからも出さないのだ。

彼女自身も女子供には手を出さない。殺さない。を身上とし、それを公言している。

だからこそ一般の生徒が通う中学校に大した問題なく通うことができるのだ。

しかし、もしもエヴァンジェリンが『桜通りの吸血鬼』なのだとしたら、その前提が覆ることになる。

『桜通りの吸血鬼』が襲うのは主に中高生の女子だからだ。

彼女が犯人だとするのならば、学園内で吸血行為に及び、あまつさえ女子供に手を出さないという自らがタブーとしている事柄をなしていると言うことになる。

それが事実だとすれば、彼女に待っているのは破滅しかない。

ただでさえ今の彼女は学園結界に魔力の6割以上を持っていかれ、そのうえで対魔結界により全てにおいて一般人程度の能力に弱体化されているのだ。後は、学園結界を強化することで真綿で首を絞めるかのように彼女は弱り、そして消滅するだろう。

いや、その前に魔法教師の誰かが彼女を討伐すると言いかねない。

現状、これまで、いついかなる時も彼女を好意的にとらえた魔法使いはこの学園には存在しなかった。

それは彼女の噂や、悪の魔法使いだから、という外聞のみで判断してしまった者が多数を占めていたからだ。

もつとも、高畑は知らないがそれ以外の要因で彼女を好意的に見ることができない者もいる。

一部に過ぎない数であるが、ガンドルフィーニや神多羅木などがそれに該当する。

ガンドルフィーニも神多羅木もそう至った経緯こそ違えど、自分たちで考え、彼女と接し、その結果エヴァンジェリンの生き方を嫌悪している。

生き方、というよりも彼女の身上”女子供には手を出さない・殺さない”を、である。

彼らは思うのだ。

何故、と。

そもそもエヴァンジェリンが600万ドルの賞金首足る最大の理由は、その2次被害の多さにある。

女子供を生き残らせると言うことは、生き残った者たちに地獄のような生活を強いると言うことに他ならない。

特に、彼女が最も多く殺した中世のヨーロッパは母子の身では生きていくのに辛すぎたのだ。

働き手をなくした家庭で、社会的に地位の低い女性と子供の身が残される・・・

そうなればどのような未来が残された者たちに待っていたのかは想像に難くないだろう。

彼女に家族を一人殺されれば少なくとももう二人死ぬ。

一人は体を壊し、一人はその復讐に。

それが『悪しき音信』『禍音の使徒』という二つ名の所以であり、彼女に関わった者たちの末路からそう呼ばれる。

ガンドルフィーニは他の方法で生き残ることはなかったのかと考え、神多羅木は生き残ることがそんなに重要だったのかと考える。

故に何故。

故に嫌悪する。

「それはあり得ないよ。なぜなら彼女はこれまでも生徒を襲ったこととはなかったし、学園の警備にも協力しているんだからね」

高畑はそんな最悪の考えを振り払い、自分の中での根拠を上げる。

しかし、その根拠ですらエヴァンジェリンが進んで行っていることではなく、強要され、または仕方なく行っている行為だとは考えてもいない。

「ほう。てことは他にこの学園に吸血鬼が入り込んでる、そう言いたいんだな」

「・・・その可能性はないよ。もし入り込んでいたとしても僕らが気付かないはずがない」

学園結界にはいくつかの働きがあり、その内の一つに侵入者を探知するものがある。

それはエヴァンジェリンが管理しているものだが、今回はその彼女

から侵入者の報告はなかった。
だから、侵入しているものはいないのだと高畑は考える。

「なら、噂の吸血鬼騒ぎはいったいなんだってんだ？被害だって実際に出ているんだろうが」

事実、生徒に被害は出ている。

高等部で3人、初等部で1人、いずれも女生徒である。

そのことは高畑等教師陣も知っており、被害にあった生徒に確認も行った。

ただ、生徒の首筋には確かに噛み痕の様なものはあったが、魔力は検出されなかった。

その為、吸血鬼による犯行だとは考えられず、変つ質者による注射器か何かを用いた行為だと考えられている。

そのことに一部の魔法先生たちは吸血鬼の犯行かもしれない、と文献を用いて力説したのだが、他の多くの教師に黙殺された。

曰く、学園にいる真祖の吸血鬼のことであれば英雄の力により無力化されているのではないかと。

高畑自身も崇拝するナギースプリングフィールドの封印を何一つ疑っておらず、エヴァンジェリンを犯人として考えていなかった。

「それは不審者の犯行だよ。現在も僕たち広域指導員が総出で犯人探しを行っているんだ。もうじき解決するさ」

ヴァンにとっては、何故それほどにこの吸血鬼を庇いだてしようとするのかがわからなかった。

自分であれば、イの一番に疑いしばらく監視なり監禁なりして様子

を見る、とった穏便な方法をとるだろう。

しかし、所詮この学園にいる者たちは自分とは無関係。

数人は関係のある者もいるがそれも20に満たない数だ。

それ以外がどうなろうと知ったことではない。

それにこの男と話しているもの飽きてきた。

よってヴァンは吸血鬼を渡してこの場から去ることにした。

「あー、そうか。なら勝手に持っていけばいい。だが忘れるなよ？
最初にちよっかいかけてきやがったのはそいつだからな」

「ああ。そのことは伝えておくよ」

高畑はそう言いながら、目線でヴァンにこの場から去るように促す。
相手に先を譲ると言うのはまだ相手を警戒しているという証拠である。

「そうかい」

しかしヴァンにとって高畑などどうでもいい存在。

返す言葉を残すと、その場から歩き去っていった。

その際、高畑にも気づけない速度でヴァンの両隣りに2頭の犬が駆け寄っていったのは全くの余談である。

そのことで高畑が警戒を強めたのはさらに余談である。

3 side end

悪魔と後始末（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

今回話的にはほとんど進んでません。

今後の話に対する布石となっております。

例えば、ガンさんとか、神多さんとか。教授とかですね。

いろいろな作家さん達の作品ではエヴァ擁護が多いようですが、ネコヌマ作品では風当たりが強いです。

何もしていないのに真祖にされた↓真祖と言うだけで命を狙われた↓殺さなければ生き残れなかった↓でも他の奴らとは違う↓”誇りある悪”（女子供は殺さない）↓自分より強大な悪に殺される覚悟

な感じのエヴァさんですが・・・無理じゃね？と思うネコヌマです。

600年生きたアドヴァンテージ+真祖・・・どうしろと？

しかも外見は幼女ですよ？殺しづらいたら・・・ねー？

誇りある悪のところは完全に私見です。

ただ、中世ヨーロッパにおいてそんなこととしてたら恨みスパイラルが半端なかったろーな、と思うわけです。

別にエヴァさんがしんどけば、と言うつもりはありませんが残された人たちは大変だったろうと思うわけです。

生きていれば名を残す人もいただろうし、子を成すものもいたでしょう。対するエヴァさんは・・・

神多羅木さんとかはそこが気に障る、と言う設定。

今回より投稿を再開と言う形になります。

おそらく週一ぐらいのペースになるかと思います。

遅筆になりますが今後もお読みいただけると嬉しいです。

では、次回もよろしくお願いします。

悪魔と？ 憧れと（前書き）

皆様お久しぶりです。

覚えてますか？

ネコヌマでございます。

とりあえず、リハビリ的なお話です。

ですので短めとなっていますがご了承ください。

では、始まります。

悪魔と？懂れと

山の様に築かれた書類を一瞥し、彼、クルトIIゲーターは宙を仰いだ。

そして故人と言われているものについて思考する。

公的に彼が死亡扱いになったのは十年前のことだ。

それ以前にも死亡説は流れていたが、十年前を機にそれは公的なものになった。

そうさせるだけのものがあつたからだ。

英雄の“息子”の登場である。

それまで行方不明扱いにはしても、決して死亡扱いにはしなかった元老院はその知らせを受けるや否やすぐさま彼の死亡を発表したのである

これには当初、多くの反発や疑問の声が上がった。そもそもあの英雄が簡単に死ぬわけがない、と。

しかしそんな人々も「彼が死亡したと言うのは確かなことであり、われわれにとっても非常に心苦しいことだ。しかし、悪いことばかりではない。彼は亡くなる前に一人の子を残していった。そう、英雄の遺児を。」という元老院の発表に溜飲を下げていった。

それほどに彼らの英雄に対する思いは強く、そして求めていたのだ。助けてくれる存在を、継りつく対象を。

だからこそ彼らは悲しむことができた。

だからこそ希望を持つことができた。

英雄の死に、英雄の息子に。

だが、それはクルトIIゲーターには違う考えを抱かせていた。

子どもがいると言うことは母親が存在すると言うことである。それが誰なのかは彼には問題ではない。

問題なのは、かの英雄が最後に確認された地、イスタンブールにおいて巨大な魔力反応と高度に隠蔽されたゲートの起動が認められたことである。

これら二つは最重要機密として元老院のものしか知ることのできない情報である。

本来であればこれらを公表することによって英雄の健在の可能性を示唆し、民衆の不安を軽くすべき事柄である。

しかし、それは行われない。

英雄が魔法世界にいる可能性と言うのは元老院にとって都合のいい出来事であり、同時に出来のいい代替品も手にすることができたのだから。

それはつまり彼が、いや、おそらく彼らが魔法世界にいると言うことを強固に裏付けていると言っていい。

と言うことは……

そこまで記憶の海に沈んでいたクルトは、ふい、と目をつむり頭を振る。

薄々感づいていながら何をいまさら、と。

彼だけは、いや、彼とアルビレオⅡイマ、そしてガトウⅡカグラⅡシュバインバーグは気付いていたはずなのだ。

彼女の本質に。

彼女の行い、視線、それらすべてが表していたもの。

それは、滲み出んばかりの選民思想であった。

他人を同列とは決して認めず、助けを乞うた相手すら下衆と蔑む。

何より、それに起因する傲慢さ。

それらは国があった時の王としての立場なれば許容され通用したかもしれない。特定少数のある程度選ばれた人間としか会うことはないのだから、誤魔化しも効くだろう。

しかし、大戦後はどうだろうか？

彼女は大战後、自国を滅ぼし、世界を混乱に陥れたとして公的には処刑されたことになっている。極端な話、存在すら認められていないのだ。

かの監獄からの生還後、彼女は一人の人間として普通の女性として生きていくと話したと言う。

言うは易しとは言うが、一体どうしているのかと考えていたところに知らせが入った。

一人の女性として生きると言った。

元の自国民たちの生活を捨ててまで自分の幸せを求めた人物が子供を置いて魔法世界に来ている。

そう考えが到った時、かつて憧れを抱いていた女性は死んだ。

思えば初恋だったのだろう。彼女の思考はお世辞にも褒められたものではなかったが、全体を見通す考え方やダメージに対する迅速な対応。常に他人に一線を引いた態度も当時の自分には照れ隠しの様に感じられて好ましかった。非力な当時の自分には『紅き翼』のメンバーの非常識な戦闘力よりも彼女の政治力の方が身近で、そして不可侵なもののように感じられ惹かれたのだ。

彼らから離れ、政治の道で世界を救うことを決めてからも、ずっと彼の中で憧れとして存在してきた女性。

それがあの瞬間に消えた。

自国を捨て、世界を守った。

一個人として生きることを決め、子を生した。

結果、子は親を知らない。

そこに魔法世界の消滅が関わっていても、天秤にかけ、捨てたのだ。

部分だけで考えれば悲劇的に思えないこともない。苦渋の決断だったのだろう、と。

しかしだ、果して彼女が他人に流されて行ったことがいくつあっただろうか。

『紅き翼』に助力を乞うたのも彼女。

王を廃したのも彼女。

オスティアを落とすことにしたのも彼女。

監獄からの救出でさえ、後に個人として生きることを決断したのは彼女自身である。

ゆえに、それは悲劇ではなく業。

人として生きることを止め、王として立つことでしか生きていけない者の業。

幼いころに彼が感じていた不思議な違和感。まるで彼女だけ違う世界にいるような、そんな感覚を彼はこの時理解した。

人と王の違い。

おそらく彼女は人の間で生きていくことはできないだろう。

王とは国と言う枠組みの中で、人の上に立つことでしか生きていけないのだから。

結局考え込んでしまった自分に苦笑しながら、その原因である書類に手を伸ばす。

<side 高畑>

「ならん」

「まあまたんか、高畑君。確かに今回の件では不審なことが多すぎる。なぜか魔力が薄れた地帯、そして不可思議なことに、魔法を使われた痕跡もなく昏倒させられていたエヴァ。そして君の言う気づいたら移動していた犬。確かに、確かに危険かも知れん。得体もしれない、素性も定かではない人物をこの麻帆良に入れておくの早まったのかも知れん。だがのう、一度入れてしまったからには確たる根拠もなしに『はい、さよなら』と言うわけにもいかんのじゃ」「だからと言って! !」

生徒や一般人への被害が出ていないからと言って甘すぎる……！！！！

そもそも僕は反対だったんだ。あんな得体の知れない男に店を構える許可を出すだなんて。

学園長も学園長だけど、神多羅木さん達も一体何を考えてるんだ！さっきまでの会議でもあの男の擁護ばかりして！！！！

確かに不確定なものは今までお咎めなしで済ましていたけど、あの男は別だ！

エヴァを昏倒させるなんて並の人間じゃできない。
なのに魔法使いじゃない？

そんなでたらめ信じられるわけないだろ！

それに、今はネギ君だっているんだぞ？

彼に何かあったらナギ達になんて言えばいいんだ！！！！

「のう、高畑君。仮に、仮にじゃ、彼をここから強制退去させたとする。その後に何が起こるか分かるかの？」

「まさか報復があるとしても？たかが一つの集団にこの麻帆良がどうにかできるとでも思いですか？」

まったく、この人は僕らの力を過小評価しているのか？

高が一集団くらいで。

その集団が千や五千人数をそろえていようと僕と学園長がいれば事足りるじゃないか。

第一、その集団が百に満たない数しかないのは調査済みなんだ。

旧世界の魔法使い程度、僕が全力を出せば5分で終わらせて見せる。

「そうじゃ。故にこの件は不問とすることにした。それでこの件は終わりじゃ」

「しかし！！！！」

「二度は言わん。よいな？」

「っ・・・わかりました」

「もう少しで新学期も始まる、君も準備があらう。下がちなさい」
「・・・・・・・・はい」

学園長はわかってない。

わかってないんだ。

<side 高畑 out>

<3side>

「えっと、ここでいいんだよな」

人影が見上げるのは通り沿いに建てられたレンガ造り風の建物。

「に、しても、だ。中学でバイト出来んのはここじゃまあ有ること
だけだよ・・・電話してすぐに採用ってどうよ？」

と建物をにらみつけている人影はどうかやらバイトさんの様だ。

バイト初日にバイト先をにらみつける。

よくあることである。

「とりあえず、研修って言ってたな・・・・はあー。変なオヤジが
店長じゃなきゃいいけどな・・・」

バイト初日に社員を気にする、これもよくあることである。

【カランカラン】

「すいませーん閉店ちゅ・・・長谷川？」

「たたた龍宮あゝ！！！」

中にいたのは褐色でグラマラスな美人。もとい、彼女の知り合いの様だ。

そしてバイトさんの名前は長谷川と言うらしい。

「どうしたでござるか？何やら大きな声でござったが？」

どこからともなく、いや、奥の方からきたであろう細目グラマラス美人。

決して黄金バットではない。

さらに言うならばどこぞの流浪人でもない。

「何で長瀬までいんだよ・・・くそっ・・・私の平穩が・・・」

どうやら二人とも知り合いだったようだ。

初めてのバイトで知り合いが二人、きっと何かの縁があるのだろう。がんばれ、バイトさん。

「くそ・・・・・・・・・・なんでこんな・・・何喰って・・・・・・・・いや・・・
需要が・・・・・・・・」

バイト先にきた知り合いと距離を置きたくなった。
たまにあることである。

余談であるが、このあと店長が現れるまでの間、彼女が独り言を言い続けたのは秘密であるそう。

悪魔と？懂れと（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

地震についてはネコヌマの地方も震度六近いのが来ました。

幸いなにも被害はありませんでしたが（数日の停電くらいですかね）、地震後に物不足になりつつあります。やはり、被災地が優先なので仕方がないのですがね。物価が上がってるのはきついですが、被災地にお住まいの方の辛苦に比べれば、むしろ比べるべくもないことです。

さて、更新が遅れたのはですね・・・时期的に分かるかと思いますが・・・狩りに行ってました。ガンナーです。重いほうの。ジンオウさん二体で心が折れそうでした。

すみません。

今後は月一くらいで、とは思いますがどうなることか。

それでもお読みいただける、と言うのであれば幸いです。

では、ネコヌマでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4884n/>

悪魔が来たりて

2011年3月26日00時26分発行